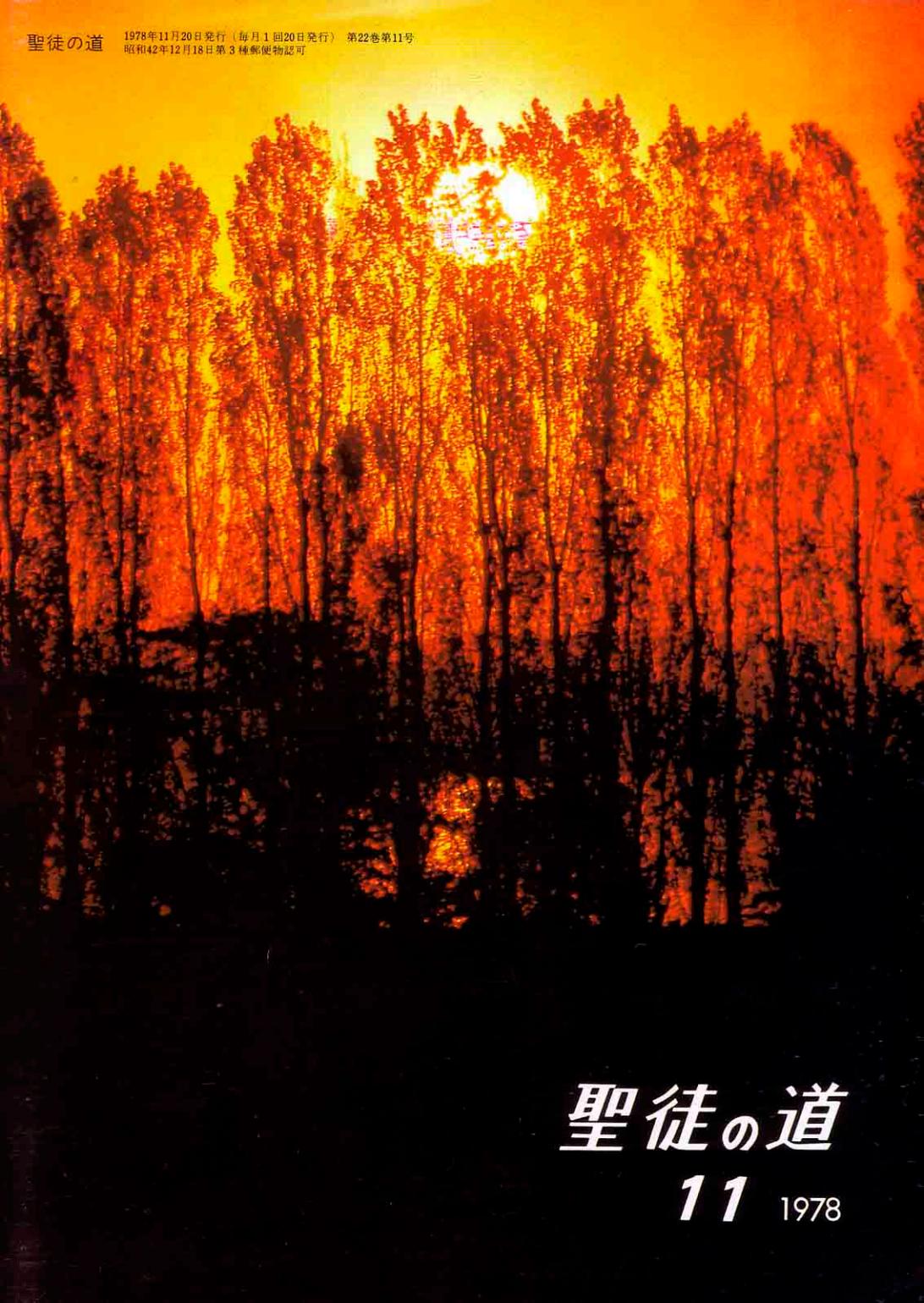


聖徒の道

1978年11月20日発行（毎月1回20日発行）第22巻第11号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可



聖徒の道

11 1978



HOUSE OF THE LORD
BUILT BY THE CHURCH OF
THE HOUSE OF THE LORD
IN THE YEAR 1850
BY THE REV. J. W. WILSON
AND
THE BRETHREN OF THE CHURCH

大管長会

スベンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

マリオン・D・ハンクス
ロバート・D・ヘイルズ
ディーン・L・ラーセン
リチャード・G・スコット

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (翻訳部長)

(左の写真)

オハイオ州カートランドで1836年に献堂された近代の最初の神殿。当時、教会の中心はカートランドにあった。この神殿が使用された期間はわずか2年で、迫害と共に放棄された。この建物は今なお残されているが、所有権は当教会にない。

もくじ

神のかたちに……………	マリオン・G・ロムニー……………	2
父親の務めを果たす……………	オルソン・スコット・カード……………	4
犠牲の香り……………	トーマス・J・グリフィス……………	8
ジョセフ・スミスの医者……………	リロイ・S・ワースリン……………	10
生涯最良の日……………	ジェイ・A・ペリー……………	13
質疑応答……………		18
かみの子です……………	ロバート・D・ヘイルズ……………	23
ふくしプログラム……………	D・リチャード・クラーク……………	27
おもちゃばこ……………		30
十代の開拓者……………	ゴードン・アービング……………	31
ジョン・テイラー 隠匿の地よりの書簡……………		38
ローカル・ニュース……………		43

表紙の説明

モントローズの日没。ノーヴーをあとにした聖徒たちは、この地点でミシシッピ川を渡り、グレートソルトトレイク盆地に向けて旅立った。ジェド・A・クラーク撮影



聖徒の道 11月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0518 JA
Printed in Japan

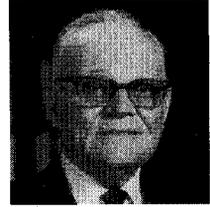
郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 まつじつ 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

神のかたちに

第二副管長

マリオン・G・ロムニー



「はじめに神は天と地とを創造された。……神は地の獣を種類にしたがい、家畜を種類にしたがい、また地に這うすべての物を種類にしたがって造られた。神は見て、良しとされた。

神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と地のすべての這うものを治めさせよう』。

神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。

神は彼らを祝福して言われた、『生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ……』。(創世1:1, 25—28)

主はこのようにして夫と妻の関係を定められた。人は神のかたちに、男と女とに創造されたのである。そしてふたりの者はひとつに結ばれ、互いに相手の一部となった。主が彼らにひとつになるように命じられたからである。ここで主は男女に等しく言葉をかけておられる。主にあっては、男なしには女はないし、女なしには男はないのである。(Iコリント11:11参照)

夫婦は共にこの基本的な真理を決して忘れてはならない。主が定められた夫婦の関係とその目的を常に心に留めておくべきである。

夫婦は一致し、尊敬し合い、互いを思いやらなければならない。自分勝手な行動を取っ

たり、あるいは取ろうとしたりしてはならない。夫婦は互いに相談し合い、共に祈り、ふたりに一緒に物事を決めるようにすべきである。

家庭と家族の管理についても、夫と妻は親切と愛と忍耐と理解をもって相談しなければならない。

低下する一方の道徳の標準や正道をそれた習慣は、たとえそれが世間で当たり前のことであっても、私たちの家庭に侵入させてはならない。また、私たち自身の標準や関係をそれによって変えるようなことがあってはならない。自己顕示は私たちの一致を弱める。したがって、自分をよく見せようなどと思わないようにしなくてはならない。

忘れてならないのは、妻は夫の奴隷ではないし、夫も妻の奴隷ではないということである。夫と妻は対等である。末日聖徒の場合は特にそうである。ふたりはこの人生において、自分を思いやるように互いに相手を思いやるなければならない。そうする時に、それは永遠に続くのである。

「主にあっては、男なしに女はないし、女なしに男はない……男は神の王国にあって女なしに救われず昇栄することはなく、女は神の王国にあって一人で完全に昇栄に到達することはできない……神は御自身のかたちに、御自身にかたどって人を造り、男と女とに創造された。この創造において、男女は聖なる結婚の誓約によって結び合わされるよう計画

されていた。また、人は相手なくして完全ではない。」(ジョセフ・F・スミス「福音の教義」第2巻 p.3)

女性は男性に劣る者ではない。もちろん男性が神権を保持し、神権を正しく行使することによって家庭を管理するという事は事実である。しかしながら、キリストがご自分の教会を管理しておられるように、夫はみたまによって管理しなければならない。このことについて、予言者ジョセフ・スミスは聖徒たちに新約聖書の言葉を引用して次のように教えた。

「『妻たる者よ。主に仕えるように自分の夫に仕えなさい。キリストが教会のかしらであって、自らは、からだなる教会の救主であられるように、夫は妻のかしらである。そして教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである。夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。キリストがそうなさったのは、水で洗うことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。それと同じく、夫も自分の妻を、自分のからだのように愛さねばならない。自分の妻を愛する者は、自分自身を愛するのである。自分自身を憎んだ者は、いまだかつて、ひとりもない。かえって、キリストが教会になさったようにして、おのれを育て養うのが常である。わたしたちは、キリストのからだの肢体なのである。「それゆえに、人は父母を離れてその妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである。』(エペソ 5:22—31)

妻たる者よ。夫に仕えなさい。それが、主にある者にふさわしいことである。夫たる者よ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいけない。子たる者よ。何事についても両親に従いなさい。これが主に喜ばれることである。

父たる者よ。子供をいらだたせてはいけない。心がいじけるかも知れないから。」(*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」 pp. 88—89)

夫は、神権の権能を勝手気ままに行使したり、妻を脅かすために使ったりしてはならない。

ジョセフ・F・スミス大管長は次のように述べている。

「もし全能の神ののろいを受けるに値する人がいるとすれば、それは自分の子供の母親、最愛の妻、生活を犠牲にして常に彼と子供のために尽くす人をないがしろにする人である。これはもちろん、その人の妻が清く忠実な母であり妻であると仮定してのことである。」(「福音の教義」第2巻 p. 51)

「如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能^{あた}わず、または維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。」(教義と聖約121:41)

この聖句は、神権者が人に接する際の態度について述べたものであることは明らかである。特に、妻に対してはなおさらのことである。

「イエス・キリストの福音は愛の律法である。心をつくし、思いをつくして神を愛することが第一の戒めであり、第二もこれと同様である。すなわち自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。これも結婚関係においておぼえておくべきことである。妻の望みは夫の望みであり、夫は妻を治めるであろうと言われている。しかし、その支配は専制ではなく愛のうちに行為すべきである。神は人々が墮落して生きている資格を失わない限り、決して専制的に支配されることはない。」(「福音の教義」第2巻 p. 5)

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」(創世1:27)

夫たる者よ、妻たる者よ。愛の律法に従い、神に似た者となるように努めようではないか。神は愛であるから。

「毎朝、私はジョギングに出掛けます。ときどき、6歳の息子が早起きして私についてくることがあります。もちろん、息子はあまり遠くまで行けないので、途中で私が帰ってくるのを待ちます。それからふたりで帰る道々いろいろなことを語り合います。」

「息子は今、小学2年生ですが、学校の勉

強道具が一式入ったハンドケースを持っています。ときどき私は息子に、そのケースに入っている物を見せてもらいます。息子はケースを開いて、学校でのことや勉強について一つ一つ説明してくれます。時間にすればわずか20分足らずですが、とても貴重な時間です。」

父親の務めを果たす

オルソン・スコット・カード



「私は仕事でよく近くの町に出掛けます。そのような時、家族を放り出しておくことが気懸かりで、何か特別なことがない限りいつも子供をひとり連れて行くようにしています。大きな子供たちには、車の運転を任せます。こうして忙しい仕事の合い間に、失っていたものを取り返すようにしています。」

今日ほど、父親が多忙な仕事に子供を育てる時間を奪われている時はない。結局それが家族の一致を弱める要因となっている。そこで前述の父親たちのように、貴重な時間を削いで子供のために尽くすことが必要になってくる訳である。子供たちは父親を尊敬し、愛し、必要としているからである。

とりわけこうすることが必要なのが、教会で最も多忙な監督ではないだろうか。監督は職業の面でも立派に成功を収めている。それでも監督とその妻たちは、子供たちの必要を満たすこと以上に大切なことはひとつないと考えている。

フロリダ州オーランド第2ワード部のロバート・M・ピックストン監督は語っている。「とにかくもっと父親業に徹しようと思います。数年前には自分ひとりで行っていたことを、今は子供と一緒にするようにしています。でも結局は私が全部することになるのですが、それでも、そうすることによって子供たちは私の愛を理解し、私と一緒にいることを楽しんでくれるようになりました。」

どうもこの辺りに、父親が子供たちとの関係を密にする鍵が隠されているようである。つまり、わずかな自由時間を最大限に利用すること、また自由時間がなければ仕事にできるだけ子供たちを参加させることである。

父親の務めを第一に果たす

ミシガン州デトロイト第2ワード部のジョン・F・アーウィン監督は、こう述べている。「カレンダーを見て予定の組まれていない日があれば、できるだけその晩は空けて、家で過ごすようにします。一晩の仕事を2、3に

限ると確かに疲労は少ないと思いますが、むしろ私は、数日間に仕事を集中的に行なって、それで空いた夜を妻や子供たちと過ごすようにしています。」

時間を計画することは是非とも必要である。私がいつも、「子供たちと過ごす時間をどのようにとっていますか」と尋ねると、きまって返ってくるのが、「家庭の夕べだけは必ず開くようにしています」という答えである。

「月曜日の晩は、だれも電話してきません。私は監督に召された日曜日に、ワード部の皆さんに、月曜日の晩は緊急の用件以外は一切電話をかけないようにして下さいとお願いしました。」そう語るのは、カリフォルニア州サンタクララ第2ワード部のアラ・コール監督である。

しかし、家庭の夕べは親子の交わりの起点にすぎない。「毎週、私は子供を面接するようにしています」と語る人も大勢いる。その内の一部の人々は、子供の靈性を育てる面接と、「子供の現状を知る」面接を組み合わせで行なっていると語った。「学校の授業や成績のこと、友達、趣味、そのほか子供たちが関心を持っていることについて話し合います。それで、最近では子供たちの方から、『お父さん、僕の面接はいつしてくれるの』と言ってくるようになりました。」

トッド・クリストファーソン監督は、面接が型通りのものとならないようにしていると述べている。「毎週一回この時間には、子供たちがしたいことをするようにしています。いつもは話だけで終わることが多いのですが、時にはプラモデルと一緒に組み立てたり、キャッチボールをしたりして遊ぶこともあります。」

カンサス州のオーバーランドパーク第2ワード部のリチャード・P・ハルバーセン監督はこう語っている。「工夫しさえすれば、わずか30分間でもいろいろなことができます。心を通わせ合うのにそんなに時間は必要ありません。わずかな時間、特別なことをして心の

交流を持つようにすればよいのです。だからと言って、長い時間子供たちと過ごす必要がないと申し上げているわけではありません。

特に、話し方が大切です。私は決していらしたり、急がせたりしないようにしています。また、話を聞いている暇のないことを説明するよりも、子供の話に耳を傾ける方が短時間で済むということが分かりました。」

バージニア州スターリングパーク支部のジャック・L・グリーン支部長は、十代の子供たちが自分と話す時間をとってくれないという問題を抱えていた。「それで私は、子供たちがダンスや活動に行く時、時間の許す限り彼らを送ることにしました。このようにして子供たちと話をし、その友達を知り、彼らの会話に耳を傾けることができるようになったのです。それからは、子供たちと話をして友達の名前が出てすぐになだれのことだか分かるようになりました。

でも小さい子供たちのことを知るには、仕事を終えて家に帰ってきた時が一番良いようです。普通は帰宅してもまだ夕食の用意ができていません。一番下の子供は私と遊びたくてたまらないので、私はその子をひざに乗せ、しばらく一緒に遊ぶことにしています。」

ピックストン監督はまた、子供と語り合う絶好の機会を教えてくれた。寝る時がそれである。奥さんのバーバラはこう語る。「私の主人は、夜家にいる時には、子供たちを一人ずつベッドに連れて行き、長い時間話をして聞かせます。主人の方が私よりも子供たち一人一人とよく話しますわ。時には、小さい子と一緒にピアノを弾いたり、ダンスをしたりすることもありますよ。」

「私は運がいい方かもしれません」と語るのは、アリゾナ州メサ第15ワード部のマイロ・レバロン・ジュニア監督である。「私は仕事の都合で自分の子供たちをパートタイマーとして雇っていました。そのお陰で、仕事の後、家に一緒に帰ることができました。その10分間が非常に大切でした。私たちは車の中でじ

っくりと話し合えたのです。」

次に考えられるのが、休暇の過ごし方である。キャンプやハイキング、家の増築や修理は、休暇中に家族で行なえる絶好の活動である。カリフォルニア州パシフィックワード部のロイド・D・ウィルソン監督は、キャンプや釣りが大好きであるが、こんな休日の過ごし方を教えてくれた。「数年前、私は高校3年生の長男と、次男、それに彼らの友達をひとり連れて、ネバダからコロラドへ自転車旅行に出掛けました。そして、1日中自転車に乗り、疲れた所で休むことにしたのです。この旅行で、一日に200キロ以上走った日が何日もありました。とにかく、私たちにとって、この旅行を一緒に計画したことが何よりも意義あることでした。」

一緒に過ごす時間をとる

しかし、どんなに入念な計画を立てていても変更を余儀なくされることがある。残業をしなければならぬ急な仕事が入ってきたり、出張しなければならぬ時、あるいは農作物の収穫期に入った時がそうである。そのほか交代制の仕事に就いている父親も、数日間家を空けることになる。このような父親は、仕事を辞めない限り、できることが限られる。

「あなたは一体その問題をどのようにして解決なさいましたか。」私は、ミシガン州ミッドランドステーク部のロバート・C・ウィットステーク部長に尋ねた。

「立派な妻を選ぶことですよ。」これこそ多忙な父親が家族を正しく導く秘訣である。もちろん、家庭において父親に代われるものは何もないが、それでも仕事の都合や教会の召しで父親が家を留守にする場合、母親の心の持ち方で大きな違いが生じる。

ある監督の妻はこう述べている。「主人が監督になってから、私はとても苦労しました。なにしろ突然に、庭の仕事や家の仕事がみな私に回ってきたのですから。主人が家にいませんので、どうしても私がするしかありませ

ん。」傍らで夫がうなずいていた。「確かに家内にとって大変な仕事だったと思います。しかしこれはまた、私に大切な責任があることを教えてくれました。家に帰ると、台所の流しにはまだ食器がそのままになっており、居間は散らかり、芝生は伸び放題という有様です。それでも私は一言も文句を言いませんでした。その代わりに、私は自分から進んでその後片付けをするようにしました。そして子供たちにも手伝ってもらったのです。私のすることに一言も妻が口出ししないのに、私がどうして妻のすることに不平が言えるでしょう。」

父親が家を空けることに対する子供の気持ちには十分注意を払う必要があると語るのは、ハルバーセン監督である。「私はいつも子供たちには、『これから集会があるので、一緒に遊べないんだよ』とは決して言わないように注意しています。それは、父親を家から奪うのは教会だと言うことで教会に反感を持ってもらいたくないからです。そのような時、私はしばらく子供たちと一緒にゲームをして、それから出掛けなければならないことを説明します。その時も、ただ集会に行くと言うのではなく、それがどのような集会で、なぜ大切かを説明するようにしています。

そのようにして家を留守にしなければならぬ訳を話すと、子供たちもよく理解してくれます。また、私がわずかな時間でも子供たちと遊んでから出掛けるので、子供たちも私の気持ちを理解してくれ、放り出されているなどという意識を持たないようです。」

多忙で留守がちな父親が是非とも考えなければならないのが、残された妻と子供たちがどのような気持ちでいるかということである。と同時に、父親自身の心の状態も見逃すことはできない。

カリフォルニアのあるワード部の監督で、大学教授をしている兄弟は、次のように述べている。「私が働いている大学に、残業時間の多いことを自慢している人々がいます。彼ら

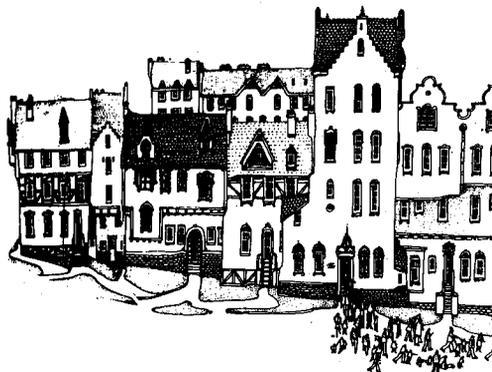
は夜遅くまで残って仕事をしています。また図書館にこもり、よく書物も出版しています。そして、仕事の面では素晴らしい成功を収めています。彼らは、そうすることはすべて家族のためであると言っていますが、私にはどうしても、家族をないがしろにしていることの方が目について仕方ありません。」

末日聖徒の父親は、教会の召しや社会の仕事でどんなに忙しくても、最優先すべきものは何かをはっきりと知る必要がある。言うまでもなく、仕事で秀でることも大切であるが、教会で与えられた召しを立派に果たすことも主が望んでおられることである。「何よりも家族が大切です」と述べるのは、カリフォルニア州リンダマーワード部のロバート・E・ソレンセン・ジュニア監督である。「仕事を最優先にするよう私に言う人々もいます。でも私にとって仕事は3番目、家族と教会に次ぐものでしかありません。今では職場の仲間もそのことを理解してくれています。その代わりに、私は自分の責任は忠実に果たすように努め、仕事をないがしろにしたり、遅らせたりすることが決してないようにしています。私はまだ一度も悪い評価を受けたことがありません。また同僚たちは、私が土曜日に出社しないことを理解してくれるようになりました。私はいつも土曜日には家族と一緒に過ごし、ワード部に出掛けて行くことにしていたからです。日曜日は言うまでもないことです。」

彼らの多くは、職場の同僚たちが社会で成功することよりもっと重要なことがあるということに気付き始めていると語っている。また、会社での抵抗もほとんどなくなっていると告げている。ある監督は語る。「私の上司にも同僚にも家族があります。そこで、しばらくすると、彼らも家に早く帰るようになりました。週に60時間働くのをやめたからと言って、状況は悪化しませんでした。むしろ、良くなり始めています。社会は家族と暮らす家庭を築くところから始まるのです。」

犠牲の香り

トーマス・J・グリフィス



あの秋の夕方、エムリス・デイビス家の前を通り掛かった人は皆、煙突から漏れる良い香りに足を止めたことだろう。それは、かき慣れた石炭の煙の匂いではなかった。もしも家の中をのぞくことができたなら、信じがたい光景を目にしたはずである。

しかしその前に、エムリス・デイビス氏のことをお話しよう。彼は、ウェールズ人にしか発音できない名を持つウェールズの小さな町に生まれ育ち、ごく平凡な生活を送っていた。近くの炭坑で事務員として働き、週に何回か町の居酒屋へ通っては、ビールを飲みながら村人の投げ矢遊びや玉突きを見物していた。

また、居酒屋へ行かない夜は、家で聖書を読んで過ごすのであった。エムリス・デイビスは、非常に宗教心のある人であった。ある時、教会の牧師と近づきになり、信徒になるように勧められた。しかし、彼はそれを断わり、牧師の説教は「絵空事」のようで聖書と食い違っていると行って当の牧師をまごつかせたことがある。それはもう数年前のことです、以来一度も誘いを受けなかった。

その彼を悲劇が見舞った。結婚生活2年の後、最愛の妻が出産のために亡くなってしまったのである。愛する妻のグウェイネスとの永遠の別離を、エムリスはどうしても信じることができなかつた。

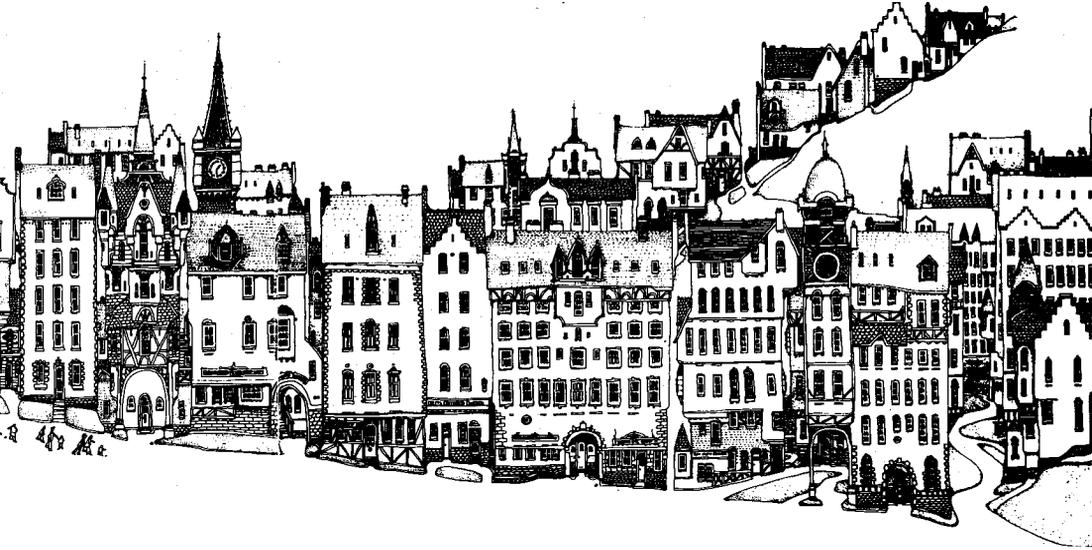
そのようなある夕方、彼が暖炉のそばで聖

書を読んでいると、玄関のドアをたたく音が聞こえた。出てみると、ふたりの青年が立っていた。エムリスが用件を尋ねる間もなく、そのひとりが言った。「私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師です。私たちの教会のことと、その教えについてお話したいのですが。」

エムリス・デイビスは、また「絵空事」の教えだろうと考え、ドアを閉めようと思った。そこで、もう一度青年たちの顔を見直した。ところが、彼らの表情には何とも名状しがたい雰囲気を感じられた。誠実と真心と勇気をふたりの顔に見たのである。

彼のウェールズ人特有の頑固な性格に反して、口をついて出たのは、「お入りなさい」という言葉であった。暖炉の火に顔を赤く染めながら、ふたりの青年は聖書に命の息を吹き込むような話を彼に語った。その話はエムリスの心の琴線に触れ、彼は単なる「絵空事」ではないと感じた。このふたりの青年が彼の家をあとにしたのは、夜中であった。その時、エムリスはふたりに、また来てほしいと頼んだ。

数日後の夕方、ふたりはまた訪れ、福音のレッスンを続けた。こうしてそれから間もなくして、エムリスの心からの祈りが答えられ



たあの不思議な夜を迎えることになったのである。

宣教師は、福音の教えを受け入れ、その教えに従って生活し、主の神殿で結び固められれば、エムリスと死別した妻は再び結ばれるという永遠の結婚の律法を説明した。それを聞いたエムリスは、魂がよみがえるのを感じた。こうして、彼は真理を見いだしたことを知ったのである。しかし、バプテスマを受けるのに難関があった。タバコが大好きだったからである。居酒屋通いは問題なかったが、彼は長年にわたっていろいろなパイプを収集することを趣味としていた。木の根のパイプ、メアシャムパイプ（火ざらが海洗石製の高級パイプ）、その他いろいろな国のパイプがあって、このパイプ集めは彼の一番の楽しみだった。

彼はバプテスマを受けたかったが、すでに生活の一部となっていた喫煙の習慣を克服する勇気が持てるかどうか、自信がなかった。炉だなの上にパイプを納めたガラスケースが置いてあり、礼拝を求める偶像のようにエムリスを見下ろしていた。

その夜、彼はベッドの傍らにひざまずき、

答えを求めて祈った。やがて朝日がウェールズの山々に射し込める頃、祈りは答えられた。主は予言者を通じて、タバコは人のためにならない、神のみたまは清くない宮には宿らないと言っておられたからである。

次の日曜日の聖餐会后、エムリス・デイビスは支部の会員たちを自宅に招いた。そして、手作りのウェールズケーキとレモネードを出してから、客たちの注目を促さう言った。

「ここしばらく、私は難しい問題を抱えていましたが、今晚閉会の讃美歌を歌っている時に、その解決法が心に浮んできました。『犠牲は天の祝福をもたらす』という歌詞がその答えです。」それから彼はパイプのことをみんなに説明した。

話を終わると、彼は炉だなの上に置いてあったパイプのケースを手にした。そしてそれをひとつずつ火の中に投げ込み、それがめらめらと燃えるのをじっと見詰めた。

彼の両わきに宣教師が立ち、後ろには支部の会員たちがいた。こうして燃えるパイプの香りが外に漂った。しかし家の中は神のみたままで満ちていた。



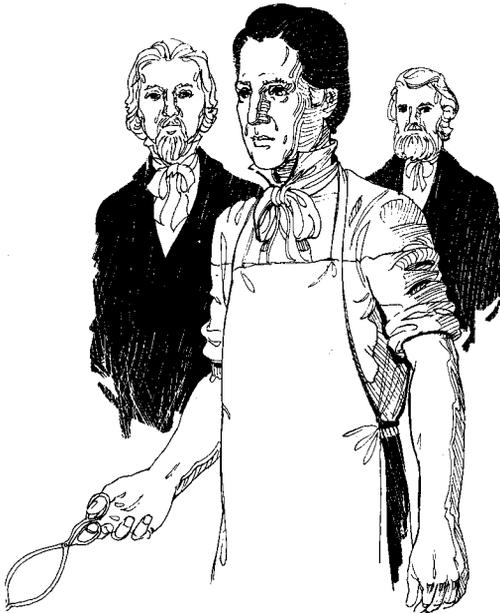
ジョセフ・スミスの 医 者



リロイ・S・ワースリン

ジョセフ・スミスが足の骨を冒されて、これを治すのに手術によるしか方法がなかった時の、勇気ある彼の話は教会員を感動させる。彼が痛みを抑えるのにアルコールに頼

らず、父の腕に抱かれて手術を受けたいと言った話は、だれでも知っている。外科医の私はいつもジョセフ・スミスの手術のことを考えると不思議に思う。特にその手術を成功さ



せた医者たちのことを考えると驚異である。

これは、1813年にニューハンプシャー州の辺ぴな田舎で起こった出来事である。スミス家の子供たち全員がチフスにかかった後、ジョセフは骨の病気（骨髄炎）にかかった。当時はおろか今世紀に抗生物質が発見されるまで、骨髄炎は恐ろしい病気であった。古代ギリシャのヒポクラテス以来、炎症箇所をただ湿布して、石こうで固めるというのが治療法の主流であった。しかしこの方法は効果がほとんどなく、骨が冒され始めると、広範囲にわたって骨の組織が死んでしまう。そして、新しい骨ができると、それにつれ死んだ組織が内部に包み込まれてゆく。その結果死んだ骨がばらばらになり、骨髄腔の中心部に入ってしまう、常時排膿するか、体の他の部分に毒が転移するかして結局死を招くのである。通常、末期に外科手術が行なわれていた。

死骨片を取り除いて排膿する技術が開発され、世に広まったのは、ようやく1874年になってからであった。また、腐骨摘出手術という手術法が確立したのは、第一次世界大戦後のことである。つまり、ジョセフ・スミスが手術を受けた時から一世紀も後の話である。1813年のあの手術を、ルーシー・マック・スミスはこう書き記している。「医者たちは足の骨に穴をあける手術を始めた。まず最初に冒されている方、それからその反対側、そしてかんし鉗子でその骨を折りとった。」

ルーシー・マック・スミスがここで述べている手術法こそ、1874年に開発されたという技術そのものである。ニューハンプシャー州

のレバノンという小さな村で、60年も前にどうしてそのような手術ができたのであろうか。

末日聖徒はその理由を偶然の一致とは思わないであろう。あまり知られてはいないが、『教会歴史』の原稿の中で、ジョセフはその医師たちの名を挙げている。その医師たちはスミス家から8キロほど離れたニューハンプシャー州ハノーバーにあるダートマス医学校の「スミス、ストーン、パーキンス」の3氏であった。

彼らは、どこにでもいるありふれた田舎医師ではなかった。マサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード医学校出身のナサン・スミスはダートマス医学校を単独で興し、後にニューイングランドの医学校を3校創設した人物で、ニューハンプシャー医学会の会長でもあった。ジョセフ・スミスの手術をする前に、コネチカット州ニューヘブンのエール医学校の内科、外科首席教授の地位を与えられていた。しかし、彼は1813年に、ニューハンプシャー州ハノーバー一帯に猛威を振るったチフス病患者の治療のため、ニューヘブンを延滞していたのである。

サイラス・パーキンスはナサン・スミスの教え子で、ダートマス医学校の卒業生である。そして当時、解剖学教授として恩師と共に医務に携わっていた。

ストーンもスミス教授の教え子であったようである。ダートマス医学校の初期のクラス名簿には、ストーン姓の学生が数名いる。

さらに注目すべきことは、ナサン・スミスが当時アメリカで最高の医学者のひとりであったことと、彼が自力で早1798年に骨髄炎の

手術を考案し、それを1827年に発表しながら、以後2世代も使用されなかったという事実である。すなわち、目の目を見る数世代前に、アメリカでは彼だけがジョセフ・スミスの足を治すことのできた人だったのである。

ナサン・スミスは、学校教育を受けずに3年間ニューハンプシャー州のコーニッシュで開業した。しかしその3年後、力の足りなさを感じた彼は、創設間もないハーバード医学校を志願した。そして5回生となり、1790年に故郷へ帰って医者になった。

彼は医学の水準を高め、医療技術の向上を図ることを自分の使命と感じていた。そこでダートマス大学の理事に医学校の設置を請願し、自らスコットランドのエジンバラで1年間、器具器材、書籍、臨床例の収集に努めた。1797年の彼の初講義は、ダートマス医科大学の初まりであった。

彼は13年間、解剖学、化学、手術、医薬、医学理論および実践を一手に引き受けて教えていたが、1810年になってニューハンプシャー州議会の認可があり、パーキンスが解剖学教授として迎えられた。

しかしふたりとも、一定した報酬はなく、授業料と共同で行なった診療代が収入のすべてであった。スミス博士はニューイングランド北部で大勢の医者育てたため、難しい症例についてよく相談を受けた。その度に、彼はほこりっぽいでこぼこ道を馬に乗って出掛けた。また、訓練の一部として、10人から20人の医学生を同伴するのが常であった。

これはジョセフ・スミスの場合にも同じであった。ストーン博士がジョセフの足の手術

に2回失敗したあと、母のルーシーはほかの医師たちの所見を聞きたいと願った。その結果、ナサン・スミスと、サイラス・パーキンス、それにダートマスの医学生たちが、手術に訪れたのである。

初めは足を切断することが提案された。しかし、ルーシー・マック・スミスは、差し当たって局所の切除手術にとどめてほしいと願い出た。ルーシーの手術描写は正確で、当時のダートマス医学生のノートに書かれていた手術記録と一致する。

この手術は成功し、ジョセフの傷跡はいえた。骨がむき出しになるほどの傷口が非常に早く回復したことは、実に奇跡的である。それまでのナサン・スミスの臨床成績も素晴らしく、切除手術後に切断手術をしたという話はひとつもない。このようにして、ジョセフは3年間松葉杖の世話になった後、命も足も助かったのである。

チフスの流行が下火になり、足の手術が終わった後、ナサン・スミスとジョセフ・スミスは共にニューハンプシャーを離れた。ナサン・スミスはエール医学校の教授となり、それから3年後、ジョセフはニューヨーク州パルマイラに移り住み、バーモント州へ戻っている。そして、やがて主の大いなるみ業を始めることになるのである。

これを偶然とは言いがたい。手術の失敗を2回経験してもまだ足の切断を拒否した勇氣ある少年と、ナサン・スミスが骨髓炎手術に関して合衆国一の権威者であることを知らずに切除手術を願い出た母親。時と人とが劇的な結合をみたのであった。

「家族全員で神殿に入った日、父と母はともうれしそうでした。あんなに幸せそうな両親を見たのは初めてです。みんなで聖壇の周りにひざまずいて手を組んだ時、『私たちは永遠の家族になった』という実感を味わいました。」

「神殿で結び固められた日から心底夫を愛するようになったように思います。」

「神殿に行って永世にわたる結び固めを受けた日は、生涯で最良の日でした。永遠に懐かしい大切な日になると思います。」

「結び固めのためにあの神聖な建物に入ってから、穏やかな平安に満たされています。あの時ほど、妻や天父とひとつであるという気持ちを感じたことはありません。」

毎年、このようにして大勢の聖徒たちの夢

生涯最良の日

ジェイ・A・ペリー



がかなえられている。この世の結婚をすでに終えている伴侶と、神殿で永遠にわたる結び固めを受ける人々は実に多い。その中には、以前あまり活発ではなかった教会員もいれば、非教会員と結婚した人もいる。また、ある種の習慣を断ち切れずに長年許可を得られなかった人々もいる。

彼らはそのような状態からどのようにして抜け出し、神殿のもたらす喜びにあずかることができたのであろうか。

ある教会員はこう語っている。「数年前までは、家を空けて仲間と玉突きをしたり、酒を飲んだりするのが最高だと思っていました。しかし今考えてみても、どうしてそうだったのか、当時の気持ちがさっぱり分からないんです。テキサスに引っ越しても、大体似たような生活でした。教会には行かないし、宗教のことはほとんど考えませんでした。そこで妻は監督のところへ相談に行ったのです。監督が長老定員会の会長に協力を要請したことは言うまでもありません。会長はそのことで祈り、自ら私たちのホームティーチャーになりました。それからおかしなことが起きたのです。彼が初めて訪れて来た日、どういう風の吹きまわしか、それまでホームティーチャーを家の中に一度も入れたことのない私に彼を家に入れたのです。彼は私のことを心に掛けてくれる友人として私に接してくれました。彼は私にスポーツは好きかと尋ねました。スポーツの大好きな私は、この言葉にすぐ心を開きました。すると、バスケットボールをしているからチームに入ってほしいと誘われました。私は喜んで承知しました。こうしてチームの素晴らしい仲間と知り合ったことで、飲み友達も本当の友達ではないという気持ちを持つようになりました。」

しかしこの兄弟は、まだ教会に出席しなかった。毎月のようにホームティーチャーから

誘われたが、「毎月、何かと言い訳を作りました。生活を変えなければならぬのが恐ろしかったのです。しかし会長は言い訳をする私に罪悪感や羞恥心^{しやうちしん}を少しも感じさせませんでした。それで、彼が家に来て私に私はいくつうだ気持ちで楽しく過ごせました。やがて私の父が亡くなりました。その時、自分の生活を父が悲しんでいたことを知って、もう父や母を悲しませることはしないようにしようと誓いました。そして、次の日曜日に、私は初めてヒューストンの教会に出掛けました。教会員たちは私をまるで活発な会員に対すると同じように受け入れてくれました。」

その後は、妻子と共に神殿への新たな道を歩み続けるだけであった。

他の人々の愛を感じる時、あるいは悔い改めに奮闘する時、人生は静かにゆっくりと変わってゆく。

1972年に、ある夫婦と6人の子供たちが神殿で結び固めを受けた。「家族全員で神殿に入った日、父と母はとてうれしそうでした。あんなに幸せそうな両親を見たのは初めてです。あの日の喜びは、20年間努力を続けた賜です」と、娘のひとりが述懐する。また、母親はこう語る。「私は信仰篤い末日聖徒の家庭で育ちましたが、改宗できると思って非教会員と結婚しました。確かに、私の希望通り主人は1953年に教会に入りました。けれども、それが私にうるさく言われたせいだということはずいぶん分かりました。それまで一度も口にしたことがなかったというのに、バプテスマを受けてから、タバコや酒を始めたのです。私はがみがみ口うるさかっただろうと思います。私は勝手に子供たちを教会に連れて行き、家に帰れば教会に来なかったと言って主人と口論しました。」

このような状態を変えたのは何だったのであろうか。「その何年か、私は一生懸命に祈り

ましたが、ただ祈るだけで主の答えを聞こうとしていませんでした。また、答えを聞いても、それを無視しました。こうして事態が絶望的になって初めて、私は主の方法によるしかないと考えようになったのです。『現在の彼を愛しなさい。彼の歩むにまかせなさい』と、みたまがささやきました。そこで私は、その勧めに従いました。すると、それから間もなく、私たちは神殿に入ることができたのです。』

同じ頃に、主は彼女の夫に別の形で手を差し伸べておられた。職場の同僚がジョセフ・スミスのことを物笑いの種にし始めたので、その話が本当かどうか知りたくなったのである。彼はもしも同僚の言う通りであるならば、教会を離れようと思った。「私はモルモン経を読み始めました。それまでモルモン経を理解しようと真剣になったことがなかったので、これは素晴らしい経験でした。その結果、同僚たちに対して教会をどのように弁護したらよいか分ると共に、真理を知りたいと

「家族全員で神殿に入った日、父と母はとてうれしそうでした。あんなに幸せそうな両親を見たのは初めてです。あの日の喜びは、20年間努力を続けた賜です。」

いう気持ちが湧き上がってきました。そこで私は教会に戻りました。その間、妻が黙って私を助けてくれたことも驚きでした。以前なら私が戻れば戻ったで『だから言ったでしょう』と言ったはずのところを、何も言わず、ただ私の手を取って、私が幸せになることなら何でも手伝いたいと言うのでした。』

こうして彼は宣教師のレッスンを復習し、福音を学んで教会に出席するようになった。また、断食日曜日の証も彼に大きな感化を与

えた。こうして彼は酒を断ち、禁煙にいでんた。「7年間タバコを吸っていましたが、意志は堅い方なのでやめるのは簡単だと思っていました。ところがいくらやめようとしても、それができないのです。やめようと思いつく度に何か起きて、ふと気付くと指にタバコをはさんで口から煙を吐いているという具合でした。主に祈り求めればタバコを吸いたいという気持ちをなくして下さるという話は聞いていましたが、私にはだめでした。それだけの強い信仰が私になかったのか、主が私にそれを通じてもっと成長することを望まれたからだと思います。自分にはやめられないということを知っただけでした。それでも私は主に祈り、どんなに難しくても再びタバコは吸いませんと約束しました。それは容易ではありませんでした。実際、今でも、タバコの匂いをかぐと吸いたい衝動に駆られます。でもあの時以来誓いを破ったことは一度もありません。」

「もし計画を立てなかつたらこうはできなかったと思います。ホームティーチャーから、一番大切なことは神殿に参入できるように目標をきちんと定めて、次に予定の日時までに目標を達成することだと教わりました。そこで、まず全部の集会に出席しようと決めました。でも、夜勤があるので大変でした。神権会に出るためには、たった1時間しか睡眠時間を取れません。しかしとにかく、出席しました。次の目標は知恵の言葉を守ること、3番目が什分の一を納めることでした。このように目標を立てることはとても効果的でした。それぞれの目標の達成には期限をきっていて、最後に神殿に参入する日付を決めておきました。私たちにはこの方法が良かったと思います。」

イギリスに住むある夫婦は、神殿に参入したことの無い人のための特別セミナーに誘わ

れた。「私たちは毎週、主の戒めを守ることによって祝福を受けた人々や、自ら生活を変えて神殿に参入した人々の証を沢山聞きました。それはとてもためになりました。また、福音に関してその週に努力する割り当てを毎週与えられました。」そのセミナーが終わると、夫妻は神殿に参入する準備ができたと感じ、必要な面接を受けた。「1973年11月9日に、私たち夫婦はエンダウメントを受けて、ジョンとジェミーを永遠の子供として私たちに結び固めていただきました。生涯で最良の日でした。」

また別の姉妹は、自分の家族が神殿に参入するまでの経過を語ってくれた。「私がすっかり不活発になってしまった最大の理由は、知恵の言葉を守らなかったことにあります。立派な教会員に囲まれた中でいつも罪悪感を感じていたのです。そのような時に夫が違う州に転勤になって、ホームティーチャーが私たちを訪ねてきて下さいました。ファクトー兄弟とマーセク兄弟のおふたりです。兄弟たちについてひとつ感動したことは、私が知恵の言葉を守っていないことをあれこれ言わず、私の守っているほかの戒めについて話して下さったことです。このようにして、訪問が度重なるうちに、兄弟たちの好意と親切がよく分かって、状態が良くなってきました。マーセク兄弟はふたりの娘を迎えに来て、飼育していらっしやるうさぎをふたりに見せて下さいました。ファクトー姉妹は私に電話をかけていらして、昔からの友達のようにお話ししました。私たちは教会に行ったことがないというのに、まるでワード部の全員が私たちのことを心に掛けて下さっているようでした。私たちはホームティーチャーとワード部の新しい友人たちのお陰で、知恵の言葉やそのほかの主の戒めが守れるようになり、神殿に行くことができました。正しい生活をしている

皆さんの幸せな様子を見て、私たちにも必ず同じことができると思ったのです。家族で結び固めを受けたあの日は、一生で一番素晴らしい日でした。」

状況や人物は様々に異なるが、このような証は数えきれない。その中で、神殿に参入する準備をした人々の気持ちは共通しており、ただひとつである。カナダに住むある夫婦はこのように語っている。「思ったほど難しくはありませんでした。最初はとてもできないと思っていたのですが、自分自身をよく見詰めて何を変えるべきかを知ってからは考え方が変わりました。」大勢の人が、完全にならなけ

神殿に参入しようとする会員は、道徳的に清く、指導者を支持し、什分の一を完納し、隣人に対して正直で、知恵の言葉を守り、安息日を聖日とし、集会に出席し、教会のきまりや教えに従うように努めなければならない。

れば神殿に参入できないと考えている。しかし、祝福を求めて熱心に準備する人は、神殿に参入しなければ完全を望めないことを悟るであろう。エンダウメントと結び固めは、一定の資格を満たす信徒たちに、なお一層の進歩向上を促すものとして授けられるのである。

その資格条件は多くない。しかし、それでは自分は何をすべきかという観点から現実を見ようとしない人々には途方もなく大きく見えるものである。神殿に参入しようとする教会員は、道徳的に清く、指導者を支持し、什分の一を完納し、隣人に対して正直で、知恵の言葉を守り、安息日を聖日とし、集会に出席し、教会のきまりや教えに従うように努めなければならない。

神殿で家族の結び固めを受けたいと望む夫

婦は、ホームティーチャーか神権指導者と一緒に、自分は何をする必要があるか、上記の資格を検討してみるとよい。ほとんどの時点で資格を満たしていることに気付くであろう。次いで、どのように、いつまでにその他の点で自らを備えるかを明記した着実な計画を立てるようにする。ほとんどの人が、思っていたより難しくないことを知ることであろう。難しいのはその気になって頑張ることだけである。

結び固めの儀式のもたらす報いは大きい。ある姉妹はこう述べている。「父は神殿に行く前は横暴ですぐにどなってばかりいました。でも今は穏やかで、紳士的で、愛情豊かです。私は何度か父を憎く思ったものです。そして母に、父は家族ではないよと言ったものでした。それが、今はとても優しくなって、同じ人とは思えないくらいに戒めをよく守っているのです。素晴らしいことだと思います。それは、父自身が私たちを神殿に連れて行って家族の結び固めを受けることができるように、主の助けをいただいて自分を変えたせいだと思います。」

「私の祖父は、自分の生活を変えて活発になり、神殿に参入しました。その後、祖父は何年も無意味な生活を送ってきたことを残念がっています。幼児の祝福がある度に、静かに涙を流すのです。祖父は教会に不活発であったために、自分の子供たちの祝福を自分でしなかったからです。儀式を施すために受けていた神権を使ったことが一度もなかったのです。その祖父もずいぶん丸くなりました。今ではとても謙遜になって、安らかな生活を送っています。」

「私は悪い習慣をやめられないことで自己嫌悪に陥っていました。自分が霊的に夫の足を引張っていることを承知していました。それで、神殿の準備をしながらひとつずつ習慣を克服したのです。今は生まれ変わったよう

に感じています。そして、今の自分なら天父に受け入れていただけると信じています。このような素晴らしい気持ちを感じたのは生まれて始めてです。」

結び固めのもたらす究極の祝福は、この世で知り得ないものである。最近の断食日曜日に、シャロンというひとりの姉妹がポールという小さい子息の話をされた。ポールが自宅近くの灌漑用水路で溺死したとのことであった。シャロンと夫のマックスは深い絶望に沈んだ。夫妻には長年子供が恵まれず、何回もの流産の末に、やっと祈りがかかって生まれた子供がポールだったからである。夫妻は初めから、ポールに愛と英知と素直さのあることを感じていた。ポールの存在は彼らにとって絶大であったがために、逆にその死は非常に苦悩をもたらしした。

その不幸があつて3週間後、シャロンはワード部の会員たちの前で、その試しにどのように応えたかを話した。彼女の涙は乾いていた。しかし、彼女を知る人々は、彼女が心の内で泣いていることを知っていた。

「兄弟姉妹の皆様、この2、3週間、皆様の助けと励ましをいただき、ありがとうございます。とても大きな試練でした。……」彼女は口ごもって目を伏せた。その後話を続けようとしたが声にならず、はっきり話そうと懸命であった。「でも、天父が私を愛して下さっていることが、前よりももっとよく分かるようになりました。小さなポールが、マックスと私が一生懸けて努力して達する目標をもう達成してしまったことを知って、本当に感謝しています。私たちが家族として聖なる神権によって結び固められたことが大きな慰めです。もしそれがなかったら、とても耐えきれない経験でした。私は、ふさわしい生活をするならば家族がまた一緒になれるということ、はっきりと知っています。」



ユタ州ヒーバー東ステーキ部
ステーキ部長
ロバート・F・クライド

祈りや話の最後に聴衆も「アーメン」と言いますが、それはなぜ大切なのでしょう。

「アーメン」という言葉は、何千年も前から使われてきました。事実、この世に教会のある時は、いつの時代にも、祈りと説教は「アーメン」という言葉で閉じられてきました。

ダビデは、旧約聖書の詩篇106編を次のような言葉で締めくくっています。「イスラエルの神、主はとこしえからとこしえまではむべきかな。すべての民は『アアメン』となえよ。」(詩篇106:48)

次に、主がモーセを通して、偶像礼拝について語られたみ言葉を見てみましょう。「『工人の手の作である刻んだ像、または鑄た像は、主が憎まれるものであるから、それを造って、ひそかに安置する者はのろわれる。』民は、みな答えてアアメンと言わなければならない。」(申命27:15)

パウロも、「アーメン」という言葉が使われることをコリント人に教えています。「Iコリ

ント14:16参照)

十二使使評議員会の会員であるブルース・R・マッコッキー長老は、次のように述べています。「聖書では約20回『アーメン』という言葉が出てくる。モルモン経はその約2倍、教義と聖約に至ってはほとんどすべての啓示が『アーメン』という言葉で閉じられている。」(*Mormon Doctrine* 「モルモンの教義」 p.32)

また今日、教会幹部は次のように勧告しています。「現在教会の会衆の間で、祈りと話の結びに使う『アーメン』の声が目立って小さくなっている。話された内容に対する同意と承諾を示すために、全会員は聞こえる大きさの声で『アーメン』と言うべきである。教会のすべての集会和集まりで、『アーメン』の言葉をもって気持ちをひとつにするよう再び強調する必要がある。」(「神権会報」第9巻第5号, p.4)

祈りや説教を「アーメン」で結ぶという指示や勧告に従うのはもちろんですが、この言葉を用いる理由をもう一度見直してみても必要です。多くの人は、「アーメン」と言うことは単に同意すなわち「その通りです」という気持ちを表明するに過ぎないと思っているようですが、実際にはそれ以上の非常に深い意味があるのです。

神の聖徒は誓約を交わす民です。バプテスマ、聖餐、神権、エンダウメント、永遠の結婚の結び固めを受ける時、聖徒たちは誓約を交わします。会衆が「アーメン」と言うのは、祈りや話に同意する旨を表明するだけでなく、それらの祈りや話の中で述べられた原則に従

うという誓約を交わしていることにもなるのです。

私たちは、「アーメン」と声に出して言うことによって自分が従順であることを確認するという義務を負っています。そのような認識を持って話や祈りに耳を傾ける人は、幾つかの事柄ができるようになります。

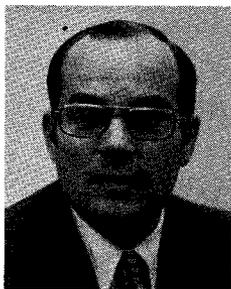
第1に、話や祈りを今まで以上に精神を集中して聴くようになります。すでに理解している原則やすでに交わしている誓約について再び聴くことによって、それに対する理解がさらに深まります。バプテスマフォントで、また神権指導者との面接で、あるいは神殿で交わした誓約が各自の心によみがえり、義を追い求めようとする意欲が高まることでしょ

う。

第2に、従順であろうという気持ちを再三再四新たにすることができます。神は次のように述べておられます。「従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。」(サムエル上15:22)

第3に、会衆全員で「アーメン」と言うことにより、一致と親密感が養われ、聖徒たちの霊性が高まります。

「アーメン」と言うことは、靈感によって聖徒たちを導く指導者に従うということです。これは神のみこころにかなうことであり、私たちが是非ともしなければならぬことです。このことを忠実に行なうならば、私たちはさらに幸福になることでしょ



ソルトレーク・オリンパスステーク部
ホラデイ第20ワード部副監督
マービン・R・バンドム

私たち夫婦は先頃、たったひとりの息子を失いました。あの子が私たちの永遠の家族の一員であることは知っていますが、今後授かる子供たちにあの子がこの世における家族の一員でもあることを理解させるにはどうすればよいでしょうか。

1972年8月のよく晴れた午後を契機に、パトリックは私たちの家族にとって忘れ得ぬ存

在となりました。その日、私はパトリックの墓を奉献したのです。

パトリックはペンシルベニア州アビントンで生まれましたが、難産がたたわずか6日後に息を引き取りました。私たちは小ざれいな墓地の近くに住んでいましたが、パトリックの遺体をそこに葬るのはやめました。仕事の関係上、私たち家族は当分の間何度か引っ越しをすることになるだろうと思ったからです。そこで、自分たちが将来住もうと決めていた地に埋葬することにしました。そこならば、墓参ししやすいと思いました。

そこで、葬儀を終えた後、私たちはパトリックの遺体を、両親の住んでいた故郷のユタ州に埋葬しました。その後、私はヨーロッパに転勤を命じられ、2ヵ国に一時の住居を構えました。それから再びユタ州に戻ってきました。ユタ州にパトリックを葬るという私たちの判断は間違っていないでした。

私は、パトリックの墓地で捧げた奉獻の祈りの中で、私たち家族がふさわしい生活をして、いつの日かパトリックが現在いる完全な場所で彼に会うことができるようにと、一心に天父にお願ひしました。6年経った今も、私たちは同じ祝福を願って祈りを捧げています。これがまた、その目標を達成するための家族の励みとなり、チャレンジとなっています。

私たち家族は、この尊い息子であり兄弟であるパトリックといつの日か再会して、家族として生活できるよう祈っています。また、現在のパトリックの幸福と成功を祈ることもふさわしいと感じています。いずれにしても私たちは、パトリックが万事申し分のない状態にあることを知っています。幼くして死んだ子供は欠けるところなく、主の王国に住むにふさわしいと主が約束しておられるからです。

私たちは、幸いにもパトリックの墓が近いので、ときどきその墓に出掛けて行き、家族の祈りを捧げます。そのうち子供の口から、「パトリック兄さんのお墓に行ってお祈りしようよ」という言葉が聞かれるようになることでしょう。墓に行く度に私たち家族は、永遠に関わる神聖で重要な事柄について語り合い、霊的な時を過ごしています。

私たちは、今この世に生きている子供たちと変わりなく、パトリックが私たち家族の一員であるという気持ちを持っています。そして、彼の誕生日をいつも忘れず、ケーキを作って祝うようにしています。これは子供たちにその意識を持たせるのに価値があると思うからです。パトリックは実在しており、その小さな肉体はいつの日か復活します。そして、私たちは家族として永遠に一緒に住めるのです。私たち夫婦はこのことを心から信じてい

ます。またこのことを、子供たちにも理解させたいと思っています。これは親として子供たちに是非とも望むところです。

パトリックが死んだ後、私たち夫婦は4人の子供を授かりました。そして今、白い皮表紙の覚えの書によって、彼らにパトリックのことを教えることができることを心から感謝しています。この覚えの書には、パトリックに関する証明書や、病院、葬儀、埋葬の写真、手紙、その他の小さな貴重品を収めております。この覚えの書を見る時に、私たち夫婦にも、またパトリックを知らない子供たちにも、彼の存在が身近に感じられるのです。

妻のサンディーと私は、主がこの幼な子の誕生と死を、最も美しくかつ霊的な家族の体験のひとつとして下さったことを心から感謝しています。私たちはこの体験を特別な恵みと受け取っています。主は、私たちがパトリックの生と死を甘受できるようにして下さいました。私たちはパトリックの思い出だけでなく、彼と共に過ごした、神より与えられた数日間の特別な日々の思い出も大切にしています。あの出来事があった時に私たちは、教会の書物を沢山読んで、幼くしてこの世を去る子供たちに関していろいろなことを学びました。私たちは、幼な子に関して主が述べておられる約束と彼らの将来について、親として、また家族として、感謝の気持ちを語り尽くすことはできません。私たち家族は四六時中パトリックのことを考え、彼のことばかりを話しているというわけではありません。しかし私たちは彼を忘れることがないようにと努力しています。また、パトリックが私たちに残して行った特別なチャレンジと約束をいつも忘れないようにしています。



マサチューセッツ州ポストンステーク部
扶助協会会長
ユージーニア・T・ヘアリン姉妹

私は支部の扶助協会会長に召されましたが、何をすればよいか分かりません。自分は役員肌ではないと思うのです。

私は常々、主は少なくともふたつの基本的な理由から私たちをそれぞれの職に召されると考えています。ひとつはもちろん、私たちが奉仕し、教え、他の人々の成長を助ける機会を持てるようにするためです。そしてもうひとつは、私たちがその職を果たすことによって自ら成長できるようにするためです。ですから、役員に召された人が積極的に努力するならば、主はその人の必要な能力を伸ばして下さることでしょう。その場合、特に自分を整えるために多くの努力が要求されます。

まず早急に必要なのは情報を得ることです。会長に召された女性はだれでも、扶助協会にはいろいろな特質があることに気付くはずで、会長に召された人は、短期間のうちに、扶助協会のプログラムに精通する必要があります。次にその方法をご紹介します。

まず初めに、幅広く基本的な事項をまとめている手引きを、祈りの気持ちをもって何度も読み、内容を分析し、重要な箇所に下線を

引きます。手引きには扶助協会に関する啓示、指示、経験、判断の基準、および勧告が集約されており、プログラムが定義されています。この手引きを丹念に読む時に、みたまの導きにより理解の眼が開かれることでしょう。

手引きを読み、主の導きを求めたら、次は前任の会長に会って、現在の扶助協会の長所と短所を尋ね、記録と資料を受け取ります。

会長は個々の姉妹に関して、婚姻の状況、職業の有無、住所、才能、教会歴、および活発か不活発かなど、多くの情報を入手する必要があります。また、会長会は祈りの気持ちをもって他の役員、教師を選びますが、その際、各召しに伴う義務を詳細に検討することは、各々の姉妹の能力に見合った責任を与えるのに役立つことでしょう。さらに監督は、姉妹たちを召す時に、それぞれの召しに伴う責任と、出席することを期待される集会について表を使って説明します。このようにする目的は、誤解の生じる余地をなくし、指導者訓練の重要性を強調することにあります。なおこの表は扶助協会会長か教育担当副会長が準備し、監督はこれをあらかじめ吟味した上で、その召しを受ける姉妹に渡します。期待される事柄について明確な説明を受けた姉妹たちは、献身的な奉仕へと駆り立てられることでしょう。訪問教師を召す時にも、同じようにその義務について説明する必要があります。また、訪問教師との四半期ごとの面接は、訪問教師と会長会の双方に霊的な成長をもたらすことでしょう。さらに、個々の姉妹に行き届いた配慮をすることができます。

地区代表のブライアント・W・ロシタ兄弟は私たちに、役員の実任を果たすのに役立つ有益な提案を下さいましたのでそれをご紹介します。

しましょう。(1)有能な役員とは、管理する人々を成功へと導くことのできる人である。(2)すべての割り当てと、特定の時までには達成できるよう、明確な説明を加えて割り当てる。(3)割り当てを与える時に、結果の報告日を定め、記録しておく。その記録に基づいて報告を要請する。

役員は何事を行なう場合にも、入念に計画を立て、日程を組み、それに従う必要があります。この場合、基本的な骨組みさえ組めればよく、決定を下すのに長々と話し合う必要はありません。これは、会長会で責任分担を行なうことにより効果的に実施することができます。また、自分が管理し報告しなければならない分野は何かを知ることもできます。なおすべての集会について基本的なアジェンダを作成することが必要です。

地域によって特殊な問題を抱えているところもあります。マサチューセッツ州ボストンステーク部の各ワード部、支部は、1、2の例外を除いて、いずれもソルトレーク盆地全域(幅約24キロ、長さ約32キロ)に相当する広さ、あるいはそれ以上の地域を管轄しています。30近い町や市を集めても姉妹たちはわずかで、ひとりしかない町もあります。そこで私たちは、各ワード部、支部の詳しい地図を入手し、一人一人の姉妹の居住地を書き込むよう提案しています。

改宗者が急増している今日、会員総数はめまぐるしく変わります。そのため、会員記録と訪問地区の割り当てはいつも最新の状態にしておくことが大切です。そして、これらの記録を用いて、各会員の活動や成長の相違を知ることができます。このような配慮をしないと、個々の状況を見過ごし、結果として一部の会員を失うことになるでしょう。また扶

助協会の役員は、教会の伝道プログラムの一環として、新しく来た姉妹たちに絶えず気を配り、温かく迎えるようにしましょう。これは役員の非常に大切な務めです。

しかし、何よりも大切なのは、組織を秩序立てて、運営の備えをし、「命の息」(創世2:7)を受けることです。主がこの命の息をどのように扶助協会の役員の中に吹き込まれるかを理解していただくために、ひとつの経験をお話したいと思います。

ある朝早く、新しく召されたばかりのあるワード部扶助協会会長から電話がかかってきました。前夜特別な役員教師会を開いたとのことで、喜びを隠し切れずにやや興奮気味に、事の次第を話してくれました。彼女たちは断食をして集まり、自分たちの努力に対してみたまの祝福があるよう謙遜に願い求めたそうです。ひとりの姉妹は、教会の活動に参加するのに扶助協会と訪問教師プログラムがどのような力添えをしてくれたかということと、自分に対する姉妹たちの愛と献身的な働き掛けについて語りました。また、別の姉妹は、祈りの気持ちをもって聖典を研究し、その教えに触れることから豊かな恵みを受けたことについて語り、もうひとりの姉妹は、扶助協会における姉妹同士の思いやりと愛から大きな影響を受けたことを話しました。また、イエス・キリストが神の御子であり、福音が神より与えられたものであるという証と知識を持つことの大切さについて語った姉妹もいたそうです。共に讃美歌を歌い、証を分かち合うことで、彼女たちは主のみたまによってひとつとなり、平安と喜びを得ることができました。愛と喜びに満ちたこの女性たちは、必ずやワード部全体に恵みをもたらすことでしょう。



お父の子です

七十人第一定員会会員

□バート・D・ヘイルズ



きょうかい
教会のせいてんのひとつに、「こうか
なるしんじゅ」という本ほんがあります。
そのせいてんなかの中に、わたしたちが生
まれる前まえにどこにいたかが、書かかれて
います。

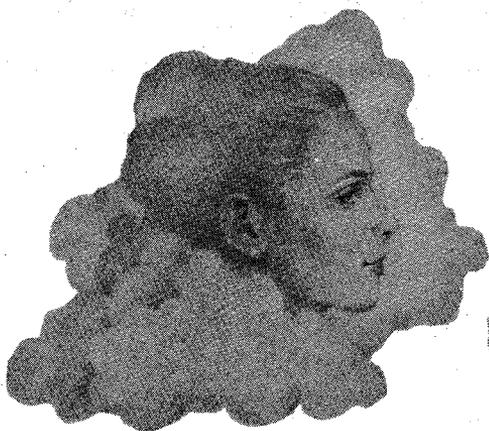
わたしたちは、どこにいたのでしょ
うか。そうです。かみさまの子こどもと
して、天てんにいたのです。でも、そのと
きは、今いまのような体からだではなく、れいで
した。わたしたちは、かみさまのれい
の子こどもでした。そして、かみさまは、
わたしたちの天てんのお父とうさまなのです。

天てんでは、れいたちの集あつまる「かいぎ」

ひら
が開ひらかれました。そのとき、天てんのお父とう
さまは、「れいたちが地球ちきゅうで、体からだをもて
るようにしよう」とおっしゃいました。
「体からだをもつと、いろいろなことを、け
いけんする。そして、いつもただただしいこ
とをすれば、また天てんに帰かえってくるこ
とができる」とおっしゃいました。

天てんのお父とうさまの子こどもたちは、みん
な、その話はなしを聞きききました。そして、そ
のけいかくを、とてもよろこびました。

けれども、そのけいかくをおこなう
ために、天てんのお父とうさまの子こどもたちの
中なかから、ひとりのれいをえらばなけれ



ばなりません。

ルシフェルは、とても頭のよいれいでした。ルシフェルは、「わたしに行かせてください。わたしは、かならずみんなをまたつれて帰ってきます。むりやりに正しいことをさせますから」と、言いました。

ルシフェルは、こうまで、自分のことばかりを考^{かんが}えるれいでした。天のお父さまのけいかくをよくはたして、ほめられたかったのです。

けれども、天のお父さまはことわりしました。そのため、ルシフェルははらを立て、れいたちの3分の1を自分にしたがわせました。そして、とうとう天から追^おい出^だされてしまいました。このルシフェルは、今、「サタン」とか、「あくま」とかよばれています。

サタンと、サタンにしたがうれいたちは、わたしたちのように体^{からだ}をもつことができません。そして今、この世^{いま}にいて、わたしたちをゆうわくし、わたしたちに悪いことをさせようとしているのです。サタンたちは、わたしたちが、天のお父さまのところへ帰れないように、じゃましようとしています。

もうひとり、天のお父さまのけいかくをおこなおうとしたれいがいました。そのれいは、天のお父さまのさいしょの子^こどもであるイエスさまでした。イエスさまは、わたしたちがこの世^{いま}で、自分^{じぶん}のおも^{おも}うま^まのことができるように、「『じゆういし』をあたえましょう」と、天のお父さまにおっしやいました。

イエスさまは、わたしたちのいちばんのお兄^{にい}さんで、わたしたちをとて



あいしていました。それで、わたしたちのようにこの地球ちきゅうに生まれてからだ、体からだをもち、わたしたちによい「もはん」をしめそうとされたのでした。また、わたしたちがまちがったことをしても、くいあらためて、ただしい生活せいかつをするならば、そのつみがぜんぶゆるされるように、わたしたちのために、「自分じぶんのいのちをささげましょう」と、イエスさまは、天てんのお父とうさまにおっしゃいました。

イエスさまは、わたしたちがときどきゆうわくにまけて、悪いことわるいことをしてしまうだろうということを、よく知っていました。けれども、わたしたちは、自分じぶんのおこなった悪いことわるいことに気づいて、くいあらためるならば、ゆるしていただけるのです。くいあら

ためるとは、悪いことわるいことをやめて、ゆるしをねがい、正しい生活せいかつをするようにいっしょうけんめいにつとめることです。

わたしたちは、天てんのお父とうさまのところにいたとき、体からだをもてることがすばらしいしゆくふくであることを知っていました。また、自分じぶんのすることを自分じぶんでえらべることも、すばらしいしゆくふくであることを知っていました。わたしたちは、正しいことただしいことをえらぶたびに、かしく、りっぱになるのです。そして、天てんのお父とうさまのように、かんぜんになれるのです。

このようにして、わたしたちは、イエスさまのおっしゃったほうほうで、天てんのお父とうさまのけいかくにしたがうことになりました。

わたしたちはみな、自分が神さまの子どもであることを知っています。ですから、悪いことをするようにさそわれても、「ぼくはしないよ」「わたしはしないわ」と言う、ゆうきをもつことができます。

天のお父さまは、わたしたちが考えているよりももっと、わたしたちをあいしてくださっています。「どこにいてもわすれない」とおっしゃっています。わたしたちひとりびとりが、天のお父さまにとってたいせつなのです。ですから、わたしたちが天のお父さまにいのり、あいしていることを話し、いましめをまもることによってあいをしめすことが、たいせつです。わたしたちは、天のお父さまにしたがおうとするときに、りっぱにせいちょうして、天のお父さまのようになれるのです。

この世の生活は、わたしたちがせいちょうするためにひつようです。わたしたちは、この世で、きょうだい、しまいとして、ほかの人びとのためにはたらき、いっしょに「えいえんのせいめい」をえるじゅんびをするのです。

わたしたちは、生まれてくるときに、

天のお父さまのところにいたときのことをわすれてしまいます。けれども、「せいいい」は、わたしたちがかみさまのれいの子どもであったことを、心の中に教えてくださいます。

わたしたちは、自分がだれなのか、この世でなにをしなければならぬのか、また死んだあとどこへ行くのか、知っておくことがたいせつです。

天のお父さまは、わたしたちがこの体をあたえてくれたお父さん、お母さんと、えいえんに天でいっしょに生活できるように、けいかくしてくださいました。わたしたちは、いましめをまもることによって、天のお父さまをあいしていることをしめします。また、この体をあたえてくれたお父さんとお母さんの言うことをきくことによって、お父さんとお母さんをそんけいしていることをしめします。

お父さん、お母さん、しょうきょうかいと、にちよう学校の先生がたのしきおしなをきいて、そのとおりにするならば、わたしたちは正しいことがおこなえるのです。そして、もういちど、天のお父さまのところへ帰れるのです。

ふくしプログラム



管理監督会第二副監督

J・リチャード・クラーク

教会には、「ふくしプログラム」というのがあります。これは、まずしい教会員や、こまっている教会員を助けるためのプログラムです。

このプログラムは、1936年、ヒーバー・J・グラント大管長のときに、教会で始められました。そして今、たくさんの方々が、この「ふくしプログラム」に参加しています。

ソルトレークに住んでいるある家族は、みんなそろって、ふくし農場に働きに行きました。家族は、お父さん、

お母さん、それに3さい、10さい、11さいの子どもたちの5人です。子どもたちは、お父さんといっしょに、さとう大根の畑の草取りを始めました。けれども、だんだんに仕事につかれてきました。10さいの子どもは、不意に立ち上がり、お父さんの方を見て、「お父さん、どうしてこんなことするの」と、たずねました。

「こうして草取りをすると、さとう大根がよく生長するんだよ、そして、生長したさとう大根から、さとうをつ



くり、それを『かんとくの倉庫』に置くようにするんだ。『かんとくの倉庫』には、さとうのほかにも、いろんな食べ物がお置かれていて、食べ物を買えない教会員がこれを利用できるようになっているんだ。」お父さんは、このように話しました。

教会のふくしプログラムは、とてもたいせつです。自分と家族がしっかりと生活できるように、いろいろなことを学ぶことも、ふくしプログラムのひとつです。

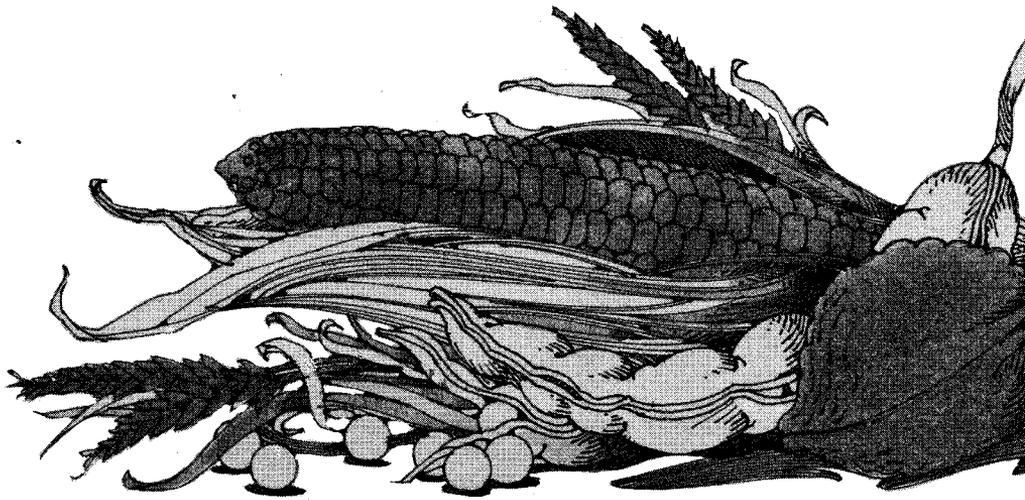
100年以上も前に、ブリガム・ヤング大管長は、教会のお父さん、お母さんに、次のように言っています。

「もし女の子が人形をほしがったら、それをもたせましょうか。はい。だれかに人形のふくを作ってもらいましょ

うか。いいえ。その子に、ふくの作り方を教えなさい。そうすれば、いつか自分のふくも作れるようになることでしょう。男の子には道具をもたせましょう。そして、自分でそりや、車を作らせましょう。そうすれば、お大きくなってから、いろいろな道具を使って、荷車や家や、そのほかの物を自分で作れるようになります。」

みなさん、自分でいろんな物を作る方法を知ることがたいせつです。今、いろんな物の作り方を学んでおけば、大きくなったときに役立ちます。みなさんは、料理や、さいほうや、物の作り方を、今教わっておきましょう。これで、楽しむこともできますし、家族を助けることもできるからです。

わたしたちの予言者、スペンサー・



ダブリュ W・キンボール大管長は、教会のすべての家族に、1年分の食べ物と着る物をそなえておくようにとっています。また、自分の家で野菜を作るようにとっています。

バージニアに住むある家族には、8人の子どもがいます。その子どもたちは、畑に、自分の場所をもらって、それぞれ野菜を作っています。

また、ほかの家族では、ふたりの男の子に、「保存食」(ひつようなときのために、家に置いておく食べ物)の表をわたしています。そして、保存食を出してくる仕事と、新しく買った物をしまう仕事をまかせています。

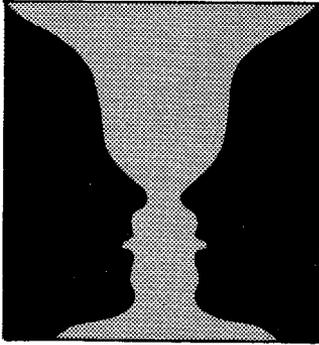
みなさんは、野菜の作り方や、食べ物の保存の仕方、さいほうや料理や物の作り方を教わるときに、たくさんの

ことを知ることができます。そして、家族をよく助けられるようになります。

このようにして、よいお父さん、お母さんになるために必要なことを学べることは、ほんとうにすばらしいことです。

みなさんは、このようにするときに、教会のふくしプログラムをおこなっていることになるのです。家族を助け、友だちやほかの人々のために働くとき、みなさんは、しあわせな気持ちになることでしょう。

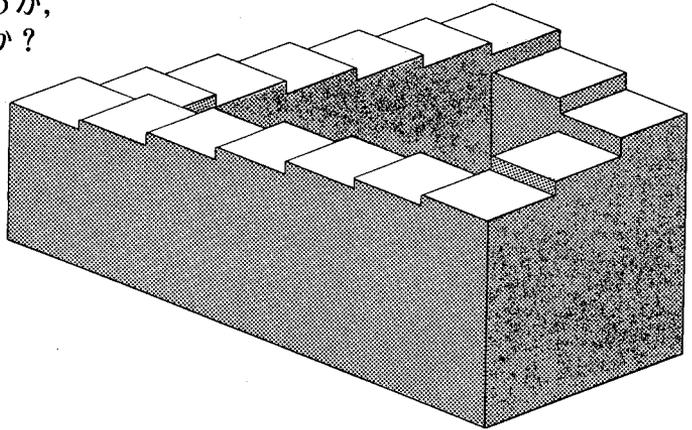
天のお父さまは、そのようなみなさんを、よろこんでくださいます。そして、しゆくふくをあたえてくださることでしょう。



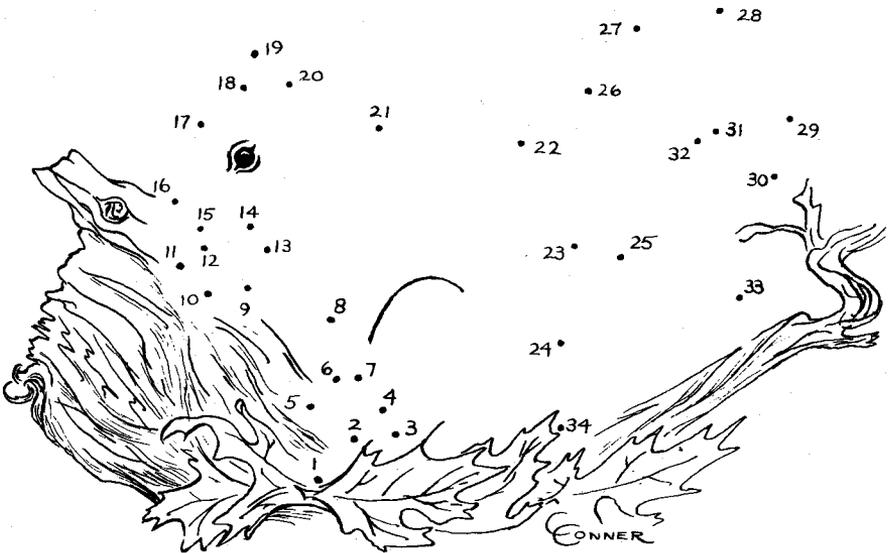
このかいだんは、のぼりはじめたら、いつまでものぼりです。また、くだりはじめたら、いつまでもくだりです。

うつわでしょうか、かおでしょうか？

おもちやばこ



てんをむすびましょう



十代の開拓者

マーガレット・ジャド・クローソン
の体験記

ゴードン・アービング



マーガレット・ジャドは、17歳の時に、家族と共に大平原を横断した。1849年、ゴールドラッシュの時代のことである。彼女は、その体験を鮮明に、しかもユーモアを交えながら文章につづっている。マーガレットが生まれたのはカナダのオンタリオ、その地で両親は彼女が5歳の時に教会に入ったのであった。大平原を横断後、60年以上たってから、マーガレット・ゲイ・ジャド・クローソンは、回想記を書いた。そこには、聖徒たちと共に生活するという家族の夢をかなえるためにユタへ旅した、十代の開拓者のあこがれと心情が描かれている。ソルトレーク・シティーへ到着してから3年後、21歳の誕生日を間近にして、マーガレットはハイラム・B・クローソンの2番目の妻となった。ハイラムは、有力な商人であり、実業家であり、またブリガム・ヤング大管長の財務責任者でもあった。ハイラムとマーガレットの息子のひとりであるラッジャーは、後に十二使徒定員会会長になった。マーガレットは、1912年にソルトレーク・シティーでその生涯を閉じた。時に81歳であった。



聖徒たちがノーヴーを出てから、両親はロッキー山脈へ旅するのに必要な幌馬車やその他様々な用具を手に入れるため、一生懸命に働きました。しかしその間、父は1、2度ひどい病気で倒れてしまいました。そのため、出発を遅らせなければなりません。父は、幌馬車を引く牛を訓練するのに相当手こずっていました。私は今でもその時の父の様子をはっきりと思い出します。牛は、雄牛が2頭、雌牛が6頭でした。雄牛の方はおとな

しく言うことをよく聞きましたが、雌牛は乱暴で手に負えませんでした。父はほかの人の助けを借りて牛をくびきにつなぎ、慣らそうと一生懸命でした。けれども牛たちは、父の望んでいる方とは逆の方角へ走り出したり、幌馬車の後ろへ回ってもつれ合ったりしました。

このような状態が何日も続きました。そして、父が牛を慣らしている間、母は祈り続けていました。後で母が話してくれたのですが、母は、私たちが寝てしまうと裏の果樹園へ行って、他の聖徒たちと共に出発できるよう道を開いて下さいと、主に涙ながらに祈ったそうです。母は、聖徒と共に旅ができれば、どんな困難にも喜んで耐えるという覚悟でした。

母にはもうひとつの心配がありました。それは、私が10代、それも17歳というロマンチックな夢を追い求める年齢だったことです。人間の感じやすい気持ちを理解していた母は、どこかの青年が私の心を惑わして、母から私を取り上げてしまうのではないかと心配していました。母は、教会なしでは生きていけませんでしたが、子供を残して出発することもできませんでした。そんな訳で、両親は一刻も早く出発しなければならないと言いました。

さて、父の努力のかがいがあったか、数週間もすると、牛はすっかり慣れました。そして、ついに、1849年5月9日、私たちは友達や親せきに別れを告げて幌馬車に乗り込み、苦勞の多い長旅へと出発したのでした。その日はちょうど、弟のライリーの16歳の誕生日でした。母の顔は、まことに喜びで輝いていまし

た。目的地に着きさえすればどんな困難も気にならないという風でした。

出発した最初の夜、私たちは草原に野営しました。父は、牛をくびきから解いて草原に放し、その後いなくなってしまうように見張っていました。私たちは、火をたくのに必要な燃料を集め、母は夕食の仕度をしていました。ちょうどその時、すさまじい雷雨が襲ってきました。そのどしゃぶりの雨の中で、私たちは全員ぬれぬずみになってしまいました。すぐ幌馬車に潜り込みましたが、風がすごい勢いで吹いてきたため、幌馬車も大して守りにはなりません。火はもちろん消えてしまい、結局その夜は夕食の仕度ができませんでした。しかし、翌朝は太陽がまぶしく輝き、すべてのものが乾きました。そして、私たちはまた旅を続けました。

アイオワ州のカウンシルブラフスまで何日かかったか覚えていません。しかし、そこで1ヵ月程野営し、後続の隊を待ったことだけは記憶しています。インディアンから身を守るには、大勢で旅をするのが一番安全だったからです。しかし、旅をしない時の野営生活は何とも単調です。そのため、再び目的地へ向かって出発することになった時には、一同大喜びでした。すべてのものが美しく輝いていました。私は若くて健康でした。私にとって、すべてはバラ色でした。責任や心配事はすべて両親任せでした。

旅の毎日は、同じことの繰り返しでした。一日歩いた後、夜営をしました。男の人は家畜の世話をし、女の人は夕食の準備をし、食事が済むと、若者たちはたいいていたき火を囲んで腰を下ろし、談笑したり、歌ったりし

ました。

野営生活では、だれもお互いの領分を尊重することになっていました。つまり、牛のくびきやなべなど、旅に必要な用具を置いた場所は大切にしました。だれか若い仲間でも来ようものなら、私は居間の安楽椅子にでも腰掛けるように、牛のくびきにゆったりと腰掛けたものです。大平原での生活は、このようでした。

弟は、小さな女の子連れの未亡人のために牛を御してあげていました。その女の子は、とてもかわいい子でしたが、母親はどちらかと言うとかなり変わっていました。弟の話によれば、彼女は毎日、大の男が10人集まっても答えるのに1週間はかかる位の質問をするということでした。弟は生まれつきのおどけもので、四六時中冗談を言っているような子でした。そんな弟の言うことを、ばかげたことでも途方のないことでも、すべて彼女はまともに信じたものです。しかし弟は、彼女の質問にほとんど参ったようでした。例えば、彼女の質問はこうです。「ねえライリー、きょうは一体どの位旅をしたのかしら。」「明日は、どの位旅をするのかしら。」「水が手に入るかしら。」「インディアンに出会わないかしら。」「インディアンに出会ったらどうされるかしら。」「インディアンって優しいの、それとも野蛮なの。」このように彼女はいつでもいい質問ばかりするので、さすがの弟も耐えられなくなってきたようでした。

弟がとうとう堪忍袋の緒を切らした頃、チムニーロックが見えてきました。馬車でも汽車でも、大平原を横断したことのある人であればだれでもこれに見覚えがあると思います。

これは高く煙突のような形をした岩で、道しるべとなっています。多分何世紀も前からそのような形だったのでしょう。その地点に着く何日も前からその岩は見えていました。そこでまた、彼女は例によってその岩について質問を始めました。すると弟は、内緒話の口調で、着いたらすぐに岩を押し倒してしまうつもりだ、チムニーロックのことを聞くのにも丁度飽きてきたことだし、チムニーロックだってもうそろそろ寿命なんだからと言いました。とにかく、そこに着いたらすぐにたたき壊すと宣言したのです。

すると案の定、彼女は、後から来る移住者たちのためにどうか岩はそのままにしておいてほしいと、弟に嘆願しました。しかし、弟は頑固にそれを断りました。すると彼女は、ソルトレーク盆地に着いたらブリガム・ヤング長老に言い付けてやると言っ、弟を脅迫したのです。これは、追い詰められた時のいつもの彼女の手でした。それでもまだ、岩から1キロ程の所に着くまで2日かかり、その間というもの、弟は首を縦に振りませんでした。そして最後に、弟が彼女の頼みを聞き入れて岩をそのままにしておくことにしようと答えると、彼女は飛び上がって喜び、その日は弟に特別の夕食をごちそうしたのです。

次に、弟自身も予期しなかった彼の最後の冗談を紹介しましょう。弟は、その未亡人をちょっとからかうつもりで、最後のエミグレーション峡谷に着くまでに彼女の幌馬車は引っ繰り返ると言い続けてきました。そこでまた彼女は、もしそんなことになれば、ブリガム・ヤング長老に言い付けてやると言いました。そして実際に、幌馬車は見事に引っ繰り返

返ったのです。そこは、おとなでも幌馬車を操作して降りるのに苦勞するほどの険しい峡谷でした。ライリーはひどくあわててしまいました。それに、まだ子供だったので、ひどくおびえました。しかし、人一倍骨をおって、幌馬車を元通りにしたのは彼でした。弟は、数人の男の人の手を借りて、幌馬車を急な道の上に起こしました。幌馬車は、下になっていた部分がめっちゃめっちゃに壊れていて、今にも崩れそうに見えましたが、中はそれ程でもありませんでした。ところが幸いにも、ソルトレーク盆地へ着く前日だったので、弟はなんとかピンチを切り抜けることができました。その後、彼女がブリガム・ヤング長老にそのことを話したかどうかはライリーも知りません。

数百キロ旅をしたところで、牛がいっせいに逃げ出し、単調な生活がすっかり狂ってしまいました。旅程が長くなり、牛の疲労が積もるにつれて、牛たちはちょっとしたことにもおびえるようになりました。中でも、私たちは牛が夜騒ぎ出すことを恐れました。前にも1、2度逃げ出すことがあったので、私たちはいつでも手はずを整えておきました。多分インディアンか、水牛の群れに驚くのだと思いますが、とにかく私たちの隊では、牛を毎晩車陣で囲っておくことにしました。また、夜牛たちを外に出して草を食べさせる時も、いつも見張りを付け、草を十分食べた後はすぐに囲いに戻しました。囲いは、車輪と車輪をくっつけて幌馬車を並べ、大きな円形をつくり、出入口を1箇所にしました。さらに、出入口には太い丸太を渡して、牛たちを完全に囲い込みました。

その頃、私たちは水牛が多くいる所を旅していました。前に、水牛が暴れ出した時のすさまじさを聞いていました。少し前のことですが、群れのひとつが急に狂ったように走り出したそうです。先頭にいた何頭かは、プラット川の高い断崖に来ると、そのまま崖を駆け下りて川に飛び込み、後から来る仲間に踏み付けられ溺れ死んでしまったということでした。

ある夜、2時頃だったと思います。野営地の皆が寝静まっていた時のことです。突然、ズシンズシンと地面を踏みならす音がしました。地面が揺れ、幌馬車はグラグラと揺れます。水牛が暴れ出した、踏み殺される、とつさに私はそう思いました。私は、頭を抱えて死ぬ用意をしていました。しばらくして、フェブと私を呼ぶ母の叫び声が聞こえました。私たちの部屋（幌馬車の最前部）から音がまったく聞こえなかったからでした。私は、毛布をかぶったまま声を殺して、「生きてるわよ」と答えました。

ところが、その騒ぎの原因は水牛ではありませんでした。騒ぎを起こしたのは、囲いを破った牛たちだったのです。何かにおびえて興奮し、急に暴れ出したのです。牛たちは、最初囲いの中をぐるぐる駆け回っていましたが、そのうちに入口の丸木を突き破って外に出て行きました。牛たちを連れ戻す手段はありませんでした。みんな、広い草原に散り散りに逃げ出してしまったのです。しかし、男の人たちは何日も何日もかかって牛を集めて回りました。そして、牛たちは、見るも哀れな姿で帰って来ました。中には、疲れ果てて死んだ牛や、殺された牛がいました。隊長の

2頭の牛は、急な丘の上まで突進して行き、そこから真逆さまに落ちて首の骨を折ってしまいました。その1頭は幌馬車を引っ張る牛で、もう一頭は乳牛でした。（大平原でのあの乳の何と甘かったことでしょう）

その騒動で、2、3人のけが人が出て、ひとりはかなり重傷でした。重傷者は金鉋鎧しで、カリフォルニアへ行くために途中で私たちに合流し、しばらく一緒に旅をしていた人でした。カリフォルニアへの移民は、実際に末日聖徒よりもかなり早く行なわれていました。その男の人は、牛を止めようとして跳ね飛ばされ、踏み付けられたのです。その時、彼は恐ろしい叫び声をあげました。その後、彼に再び会ったのは次の年の冬で、ひょっこりと野営地を訪れてきました。彼はずっと立ちひざでいました。立つことはできませんでしたが、座れなかったのです。その後、彼が金鉋鎧しに出掛けてからは、何の便りもありません。また、牛飼いの老人が言うことには、飼慣らされた牛ほど一度騒ぎ出すとどうもうで気が狂ったようになるとのことでした。しかもその行動は普通でなく、突然に暴れ出したかと思うと、稲妻のような速さで一度に何人も襲うのだそうです。

良く晴れた、ある気持ちのよい午後のこと、私たちは2度目の危機を迎えました。隊は草原をゆっくりと進んでいました。その時です。隊のすべての幌馬車が、急に思い思いの方角に向かって、飛ぶような速さで走り始めたのです。どんなに足の速い馬でもこの時の牛にはかなわなかったことでしょう。父は、幌馬車の座席に座って、何か言いながら、普段は落ち着きのある老いた牛たちをむち打ち、ま

っすぐに幌馬車を走らせました。ほかの幌馬車の牛と絡み合ったり、牛が向きを変えて私たちを乗せたまま幌馬車を引っ繰り返したりしないように、ただまっすぐに走らせました。幌馬車は、飛んだり跳ねたりしながら走り続けました。私たちは幌馬車の中で、跳ね上げられては頭をぶつけ、下に落ちては腰を打ちました。これがどんなものか、実際に経験した人でなければ分からないと思います。こうして私は再び死に直面し、また毛布を頭からかぶりました。万一死ぬようなことがあっても、その途中の様子を見たくなかったのです。けれどもすぐに母から毛布をはぎ取られてしまいました。そして、幌馬車が止まった後、どんな時でも目を開けて、逃げ出す機会をねらっていないければならないとこんこんと説教されました。

牛は力の続く限り走って、やがて止まりました。その事故で数人がけがをし、ひとりの女性が死にました。幌馬車から振り落とされて、牛に踏まれたのです。後には子供たちが残されました。私たちは皆、度重なる牛の暴走にすっかりおびえてしまいました。パニック状態に陥った牛の群れは実に脅威です。同じように、たとえ人間と言えども、恐怖が理性を支配した時には、どうになってしまうか分かりません。

私たちの家族の牛の中に、一頭とても利口な雌牛がいました。その牛は、くびきにつながれるのをいやがって、よく柳の木陰に隠れたものです。しかし、いったん父に見付かり、くびきにつながれると、その牛はよく働きました。また、乳も沢山出しました。ある時、その牛が足を悪くして歩けないことがあ

りました。すでに一頭なくしていたので、両親はひどく心配しました。ほかの人々について行けなくなるのではないかと思いました。母は、夜になったら牛を横たえて湿布してあげようと言いました。そして、びっこをひいている方の足全体にわたって湿布をしました。さて、翌朝になって牛を起こしに行った父が、急に大声をあげました。「おーい、母さん、湿布する足を間違えているよ。」すると母は、「心配しなくても大丈夫ですよ。ちゃんと効き目はあるんですから」と言いました。母の言う通りでした。牛は、その日は少し足を引きずる程度で、間もなくすっかり良くなりました。あの湿布は、きっと信仰と深いかわりがあったに違いありません。

秋の気配が漂う頃になると、私たちは、チョコレートやサービスベリー、またバッファローベリーとかスコベリーとか呼ばれている小さな赤いいちごなど、野生の果物を見付けて食べたものでした。とてもおいしい実でした。ある日、私は夜にだれかを招待することにしました。そこで、野営する場所が決まると、何人かの男の子や女の子に、自分の仕事が終わったら私のところに来るように誘いました。こういう時の誘いを断わる人はいません。みんな、喜んで来てくれました。

一方、私は、バッファローベリーパイを作ってもよいかどうか母に尋ねました。母は、もちろん許してくれました。パイは、それこそぜいたく品で、草原ではめったにお目にかかれません。私は、このごちそうで、みんなをあっと言わせたかったのです。こうしてパイは出来上がりました。私は、みんなが来る前に大急ぎで牛のくびきの椅子を並べたり、

飾り付けをしたりしました。みんなは、少し気を利かせて遅れて来ました。まず、私たちはおしゃべりをし、それから歌を歌いました。それが終わると、私はちょっと失礼して奥(と言っても幌馬車の下に置いた箱のところ)に行き、パイを運んできました。そして、パイをみんなに配りながら、私はわびるように、「もしかしたらそんなに甘くないかも知れないわ」と言いました。すると、ひとりの男の子が丁重にしかも早口でこう言いました、「いえいえ、あなたの手にかかったら、何でも甘くなるに違いありません」と。私もその言葉を信じることにしました。

みんなに行きわたったのを見て、私も自分の分を食べることにしました。ところが驚いたことに、口にしたパイの甘さときたら、まるでくえん酸でも入れて甘くしたかのようでした。草原でのパイ作りは、後にも先にもそれ1回きりでした。ときどき、みんなはあんなものをどうして食べたのかと不思議に思いますが、きっと礼儀上やむを得ず食べたのだと思います。今考えるに、野営地の砂糖を全部集めてもあのパイほど甘くはできなかつたことでしょう。

旅の間、私が一番好きだった食事は、昼食です。母は、朝のうちになべに一杯とうもろこしがゆを作り、冷めないように何かでそれを包んでおきました。また、乳しぼりが終わって、午乳を攪乳器に移すと、それもこぼれないように包んでおきました。そして、昼になって、みんなが牛に草を食べさせる時、母は、とうもろこしがゆと牛乳を出してきてくれたものでした。それは、私たちにとっては最高のごちそうでした。けれども妹のフェブ

はそれがきらいでした。食べてもお腹がすくからと言って、決して食べようともしませんでした。大平原を渡る間、だれひとり食べ物のごちそうのことで文句を言う人はいません。どんなものでもごちそうでした。もっとも、私のパイだけは別ですが。パンとベーコンは、今のブルームディングやパウンドケーキよりも数倍のおいしさでした。環境は私たちの舌まで変えてしまうものです。

旅の中で、最も苦しかったのは、ワイオミングのララミーに着く前日でした。牛が疲れきって足を痛め、歩くのも大変な状態でした。そこで父は、その朝、私たちみんなに歩くように言いました。その日、私たちは、1日中歩き続けました。私はその日のことを一生忘れないでしょう。砂は、人の足首の深さまであり、牛や馬車はもっと深く沈んでしまうのです。その夜、野営するまでに、私たちは16キロ歩きました。けれども私には、1,000キロにも感じられました。その日、私は何度も、決して疲れることのない世界へ行きたいと思つたものです。

こうしてやっと、飽き飽きする長旅の終わりを迎えたのでした。10月15日の夜、私たちは、エミグレーション峡谷の入口に到着したのです。グレートソルトトレークの盆地の光景は、何と素晴らしいことなのでしょう。こうして次の朝、私たちは朝日と共に目覚め、盆地に入ったのです。

☆

☆



ジョン・テイラー

いんとく 隠匿の地よりの書簡

第3代大管長ジョン・テイラーは、1808年11月1日、英国ミルンソープに生まれた。1838年12月9日に30歳で、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールにより使徒に聖任され、1877年10月6日、十二使徒定員会会長に支持された。そして3年後の1880年10月10日、71歳の時に大管長として支持を受けた。大管長の召しを7年間務めたテイラー大管長は、1887年7月25日、ユタ州ケイズビルにおいて78歳でその生涯を閉じた。

テイラー大管長の改宗談や生涯、教会での働きは、『聖徒の道』1975年2月号に掲載されている。歴代大管長の書簡や説教を紹介するシリーズの第3弾に当たって、編集部はジョン・テイラー大管長と第一副管長ジョージ・Q・キャノン長老の共同の書簡からの抜粋を本号に掲載することにした。なおこの書簡は、1886年4月の総大会で教会員に公表されたものである。

当時教会は激しい迫害を被っていた。ユタ州を初めその他の地に住む反モルモン教徒が、地方や中央の新聞社、ならびに他の教派の多くの聖職者と手を組んで中傷を広め、多妻結婚の教義を理由に教会に憎悪の目を向けた。その結果、合衆国連邦政府は、多妻結婚を行なっている者に選挙権を認めず、公職や陪審員に就く権利をも剥奪するという過酷な法を定めた。その上、多妻結婚を行なっている者は、500ドルの罰金を課せられ、5年間の懲役

に処せられることになった。

これらの法は末日聖徒を差別するために制定されたものであった。連邦政府の役人は、ユタ州にすでに住みついている反モルモン教徒と手を組み、多妻結婚をしている教会員を血眼になって捜し、告訴した。その上、法廷においてその教会員の妻や子供たちに、自分たちの夫や父親に対する不利な証言をするよう強要したのである。そのため、この教義を守っていた者は、姿を隠すことを余儀なくされた。テイラー大管長も第一副管長のジョージ・Q・キャノン長老も、このような教会指導者のひとりである。（第二副管長のジョセフ・F・スミス長老は当時、ハワイ伝道部で働いていた）

以下に示すテイラー大管長（とキャノン副管長）の書簡は、迫害から身を隠していた当時に書かれたものである。

いかなる時にも、主はその民が
試練に耐えるように、
また信仰の試しを十分に受けるようにと
望んでおられます。

私 たちは現在確かにひどい迫害を受けていますが、それでも感謝すべきことは沢山あります。地は豊かな食物を産しています。食物を求めて泣き叫ぶ人もいなければ、飢えて死ぬ家畜もいません。また、道端で施しを請う物もらいもいなければ、生活のできない貧民もいません。よき食物、快い衣服、広い住まいに加えて、神の平安という計り知れない祝福が与えられています。これは、主が忠実なすべての聖徒にお与え下さる祝福です。心の平安、家庭の平安、地域の平安、世からは得ることのできないこれらの平安を主に感謝し、それが取り去られることのないように祈りましょう。兄弟姉妹、皆さんの心を、神の思いやりと憐みに対する感謝と賛美の思いで満たして下さい。神はシオンについて約束しておられます。神はその約束を決して忘れたまいません。予言者イザヤの記すところによれば、シオンは「主はわたしを捨て、主はわたしを忘れられた」（イザヤ49：14）と言っ

ています。しかし主はそれに対して答えられました。

「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。見よ、わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ。あなたの石がきは常にわが前にある。」（イザヤ49：15—16）

いかなる時にも、主はその民が試練に耐えるように、また信仰の試しを十分に受けるようにと望んでおられます。

この教会が組織された直後、聖徒たちは主からこう言われました。「主は言う、われわが心に定めたり、すなわち汝らのわれに^{みきわ}適しきを知るために、死に至るまでもわが誓約を守るや否や、すべてに於てわれ汝らを試すべし。汝らもしわが誓約を守らずんば、われに^{みきわ}適しからぬ者たちなり。」（教義と聖約98：14—15）皆さんがイエス・キリストに従って義しい生

活をしていても、サタンには力があるので、皆さんは迫害を受けるのです。

しかし迫害を最も価値ある目的のために活用するというのが、全能者のみこころです。すべての忠実な聖徒はこのことを認め、理解する必要があります。末日聖徒は皆、自分自身に迫害がどのような良い結果をもたらすかを知り、また友人や隣人に及ぼす影響を考えて下さい。そうする時に、迫害によって人格を築けることでしょう。迫害の影響を受ける時に、私たちは皆、迫害の圧力を受けなかった時よりも、自分自身をさらによく知ることができるに違いありません。また、これまで全く気付かなかった特質を兄弟姉妹の中に見いだすことでしょう。私たちがこの1年半の間被った迫害はきわめて激しいものでしたが、末日聖徒はこのことから沢山の恵みを得ました。この迫害により、忠実な聖徒たちは強められ、新たな熱意と勇気と決意を抱きました。また、不注意で無関心な大勢の人々が無気力から目覚め、神のみ業を勤勉に行なおうという新たな気持ちを持つようになりました。迫害はまた、大勢の偽善者を明らかにし、彼らがかぶっていた友情の仮面をはぎ取り、真の姿を暴露しました。しかしながら、この迫害から最も学んだのは、末日聖徒の若人です。若い男女の多くは、すべてが平和で両親や友人たちの間に争いが無い時には身の危険や信仰の危険など感じることなく、世の人々と親しく交わることができるという考えを持っていたようです。末日聖徒も異邦人も彼らにとっては同じでした。彼らは両者がなぜ真の友愛を築けないのか、その理由が分かりません

でした。様々な出来事を経験した末日聖徒なら、子供たちがこのように思い込むことがいかに危険なことであるかを知っています。しかし彼ら若人は、この度の一連の出来事に直面したことで、このような危険な夢から覚め、迫害の激しさを実感してきました。末日聖徒と世の人々の間に引かれた境界線は、きわめてはっきりしています。そのため彼らは(背教者とならない者は皆)両親や同胞の側に立つようになりました。そして彼らの信仰と、敵対する者の信仰の違いが、これまで感じたことのないある種の強い力で、彼らの心にはっきりと刻み込まれたのです。この迫害は明らかに若人の心に影響を与えています。そしてその若人たちに、迫害は今後も決して絶えないだろうという気持ちを抱かせるに至ったのです。彼らは敵対者から受ける苦しい経験を通して、救い主のみ言葉が真実であることを学んでいます。「もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではない。かえって、わたしがあなたがたをこの世から選び出したのである。だから、この世はあなたがたを憎むのである。」(ヨハネ15:19)

主イエス・キリストは使徒たちに信仰の大切さを教え、次いで使徒たちは世の人々にそのことを教えました。そして信仰は今も当時と同じ実りをもたらしていますが、民が墮落すると同時に、信仰は清い民の中から姿を消してしまうことでしょう。このことを世の人はすでに知っていたに違いありません。主は地上にこの信仰を回復され、そして今また

ちはそれを育てているのです。この信仰を持っている人が清い限り、この信仰は存続し、正義の実りをもたらします。このことをすべての末日聖徒が証明してきました。信仰は養い育てなければならないものです。そうすることによって強くなるのです。現在は、末日聖徒にとって、あらん限りの熱情をもってこの宗教のために献身すべき時です。聖霊と聖霊の賜を受けられるような生活をする必要があります。このことは、男女を問わずすべての人にとって、直面する試練に耐え抜くために欠くべからざることです。

ここで、教会員と役員にあらゆる不道徳と不品行に反対するよう再度警告することは当を得ていると思います。私たちは、宗教の衣の影で不道徳行為を教え、実行していると非難されてきました。しかしそのようなことは断じてありません。これ程の事実無根の嫌疑はほかにありません。と言うのも、この世に人が住み始めて以来、男女間の清さを保つことの大切さを、末日聖徒イエス・キリスト教会以上に厳しく教えている哲学理念、倫理規範、信仰箇条はないからです。サタンはこのことを知りすぎる程知っています。私たちは行ないと信仰を一致させるようにしようではありませんか。もしもこれに関する神の律法を破ったならば、いかなる努力も、家族の絆も、財力もこの処罰から私たちを救うことはできないからです。しかし数週間前、悲しいことではありますが、十二使徒定員会は純潔の律法を犯したひとりの教会員を教会から破門しました。彼は教養のある、経験豊かな、分別のある人で、長年教会の教えに従ってき

ました。しかし、彼の受けている教育や経験、高い神権の職も、この律法をはなはだしく犯した罪から彼を救うことはできませんでした。これは彼の場合だけではありません。すべての人について言えることです。教会の役員はだれにも悪意を抱かず公正に、しかも神の戒めと聖なる神のみ名に十分敬意を払ってこの律法を監督しなければなりません。イスラエルの民よ、聴いて下さい。御父の日の光栄の王国に入ろうとする者よ、心の清くない者は神を見ることができません。自らの情欲を捨てて、神の律法に完全に従う者でなければ、神のみもとに永遠に住むことはできません。社会の状態は、社会を構成している一人一人の状態によって決まることを心に留めて下さい。全体はそれを構成するものと同質のものになるのです。もし一人一人が賢く、正しく、理解力があり、正直で、尊敬に値する、清い人であれば、これらの特質によってその社会は他の社会とは違ったものになることでしょう。このことを私たち一人一人に当てはめてみると、キリストの教会を救い主の花嫁として備えたいと思うなら、私たち一人一人が福音の教えに従って生活をし、花嫁が主のみもとに行く前に飾り付けなければならない徳で身をまとう必要があります。個人の清さ、信仰、勤勉さ、善行は、隣人に委ねたり、他の人の責任に帰したりできないものです。一人一人が各自の義務を果たし、責任を負い、自分の家を整え、自分の召しを全力を尽くして遂行しなければならないのです。また、神に近づいていただきたいと思うなら、自分から神に近づかなければなりません。

主は私たち家族を 導いて下さった



日本名古屋伝道部
高岡支部

松井 茂

「ごめん下さい。御主人さんいらっしゃいますか」と玄関でふたりの外人が妻にこう尋ねていました。私が出て行くと、「少しお話したいことがあります」と言うので、玄関で話すのも失礼と思い、部屋へ上がっていただきました。すると、ジョセフ・スミスが神様とイエス・キリスト様にお会いして、本当の神様の教会が回復されたという話でした。けれども私は、そのような話を信じる事ができませんでした。

その頃の私はパチンコと麻雀が大好きで、毎週土曜日には徹夜麻雀をし、家庭も顧みずに好き勝手なことばかりしていました。そのため、妻はいつも不平を言い、愚痴をこぼしていました。暴力を振るっての喧嘩こそしませんでした。口論することは度々で、互いに空しい気持ちになったものでした。今考えると、私は高慢でした。自分は家族の長でお前たちを養っている、自分がかせいでくる金はどう使おうと文句は言わせない、という考えの持ち主だったので。

宣教師たちは週に1、2度私たちに福音を教えに来て下さいましたので、わずかながら

も真理というものが分かりかけてきました。それでも私は麻雀とパチンコをやめることができません。ですから長老たちの話を聞いても、教会へは全然行きませんでした。そうしたある時、私の心に「教会はどんな所で、みんなどんなことをしているのだろう。一度行ってみようか」という思いが浮かんできました。

教会へ行ってみると、いつも来て下さる長老ふたりと、全然知らないふたりの宣教師、それに10人程の教会員と5、6人の子供たちがいました。そして、初めて会う私たちに快く握手を求めてきました。

日曜学校が始まり、分級した後、支部長さんから自己紹介をするよう言われたので、私は本当のことを話しました。「私の趣味はパチンコと麻雀です」と。全員爆笑でした。

教会へ何度か集っても、宣教師から福音の教えを聞いても、私はパチンコと麻雀をやめることができませんでした。こうした折、他の宗教の教えを聞く機会がありました。その人たちも大変素晴らしい人で強い証を持っていました。私たちはこの時随分迷いました。

けれども、私に初めて宣教師が教えて下さった、ジョセフ・スミスが天父と御子にまみえた時にどの教会にも加わらないようにと言われた、という言葉が頭の中に浮かんできました。そして「やっぱりこの教会は本当の神様の教会なのかな」と思うようになりました。

また、子供たちにも良い模範を示さなければだめだと思い、モルモン経や聖書を少しずつ読むようにしました。そこには神の戒めを守り、高慢にならず謙遜になりなさいなど、沢山の事柄が書かれてありました。深く考えてみると本当にその通りです。私はバプテスマを受けなければならないと、だんだん強く感じるようになりました。こうして今年の1月26日に無事バプテスマを受けることができました。これも主が宣教師を通して導いて下さったことと、心から感謝しています。

その頃、残念なことに妻の方が近所の人やほかの人たちの迫害的なことがあって次第にこの教えから遠ざかってしまいました。そし

て妻は「絶対にバプテスマを受けません」と宣教師や私の前で断言したのです。私は妻のこの言葉にびっくりしましたが、いつか妻もきっとバプテスマを受けて家族全員で教会へ行ける日が来ると信じて、いつも神に祈っていました。

宣教師たちの心からの断食もあって、神は妻の心をだんだんと変えて下さいました。そして、今年の4月22日に長男の伸好と共にバプテスマを受けてくれました。今では家族全員で教会に楽しく集っています。主は、私たち家族を見捨てることなく温かく導いて下さいました。本当に感謝の気持ちで一杯です。時としてなかなか行動が伴わないことがありますが、少しでも行動に移せるよう妻と頑張っています。また、そうしなければならないと強く感じています。末日聖徒イエス・キリスト教会は本当の神様の教会であることを証致します。イエス・キリスト様のみ名を通して申し上げます。アーメン。

松井文子

わが家へふたりの外人宣教師が訪れてきた時、私は友達になれれば楽しいだろうという気持ちから、話を聞くようになりました。私は宗教がとてもしらいでした。弱い人間が神仏にすがって生きていくのだと思い、宗教を偏見の目で見ていたのです。でも、私たちは8ヵ月間宣教師の話聞きしました。その間に、私の家に来て下さった長老は全部で14人にもなります。私は高慢で、信仰に対してとてもしかたくなでした。ですから福音の話聞きながらも、私は絶対にバプテスマを受けまいと決心していました。什分の一の問題もあったので、主人がバプテスマを受けると言った時には猛反対しました。しかし主人は1月26日にバプテスマを受けました。それからの主人はまるで別人のようでした。麻雀やパチンコはピタッとやめ、聖書やモルモン経を熱心に読み、進んで家事の手伝いをし、子供たちに

良い模範を示すようになったのです。そんな主人を見て、私は人間は何と変わるものかと、不思議でなりません。それでも私は素直に福音を勉強する気になれず、この家から蒸発してしまいたいとさえ思ったほどでした。そんな私でしたが、長老や兄弟姉妹、それに主人の愛と励ましを受けて伝道部大会に出席し、伝道部長御夫妻の素晴らしい話を聞いた時には、勉強しなければならないという気持ちになりました。ところが日曜日にも仕事をしていた私は、まとも問題に直面しました。そしていや気がさし、教会に入ると周囲との調和が乱れ、人付き合いが悪くなる、なぜ私ばかりに強く勧めるのだろう、などと考えてしまいました。しかし、主人の驚く程の模範に心を動かされ、次第に自分の愚かさに気付き始めました。そして、私は勇気を出して日曜日の勤めを休みにしてもらおう頼む決

心をしたのです。4人の長老が私のために断食をして下さいました。何と素晴らしい人たちでしょう。私はわがままな自分を反省しました。日曜日に休めるという許可の下りた時のうれしかったこと。このことから、神様が生きていらっしゃるということがはっきり分かりました。そしてバプテスマを受けようと決心しました。

それなのに、私はバプテスマの面接の時にまたも長老を困らせました。「なんとなく受けたくない」と言ってしまったのです。もちろん面接はパスしませんでした。ヘンドリックソン長老とスミス長老は、夜遅くまで私に愛を示し、心の乱れを直して下さいました。そして4月22日、私は長男の伸好とふたりで、主

松井伸好（10歳）

ぼくの家にとつぜん長老たちがこられました。ベーリング長老とカーター長老といえます。それから週に1回か2回来るようになりました。そのときから長老たちとなかよしになりました。長老たちからいろいろな話をききました。上しまいと松井ひろみしまいがこの話をききにきました。

それから教会にいきました。教会にはたくさんの方がいて、べんきょうしておられました。

ぼくたちの家には、クック長老やヘンドリックソン長老、スミス長老、リチャード長老、

人の手によってバプテスマを受けました。その時の気持ちは今までとまるで違い、とても落ち着き、安らかでした。7歳の娘のあやかも8歳になったらバプテスマを受けると言っていますので、とてもうれしく思っています。

それから1ヵ月、これまでの沢山の心配やこだわりもすっかり消え、善い行ないを進んですれば神様の祝福が得られることを知りました。家族が真の幸せを味わうことができ、感謝しています。これから一生懸命勉強してこの教えを知らない人々のお役に立てたと思っています。そして死んでから悔いすることがないように善い行ないをして、永遠の生命を得たいと思います。イエス・キリストのみ名によって申し上げました。アーメン。

ウエストーバ長老、ヒル長老など、たくさん長老たちが、かみ様の話をしにきてくれました。ぼくたちのすきな長老ばかりでした。それから4ヵ月ほどたって、4月22日に、ぼくはおかあさんといっしょにバプテスマをうけました。

それから今は、田代長老という日本人のせんきょうしやエバンズ長老に、てじなやトランプなどもおしえてもらっています。ぼくは「教会にはいってよかったなあ」と思います。これは、ぜんぶイエス・キリスト様のみ名によってお話ししました。アーメン。

松井あやか（8歳）

わたしたちのかぞくが、かみさまのお話をききに、きょう会にいきました。きょう会にはいったとき、しらない人がいっぱいでした。そして、まえ田先生やぬまたさおりちゃんにしょうかいしてもらいました。わたしたちもしょうかいしました。それからなかよしになりました。そしてだんだん、かみさまのお話もわかり、きょう会に行くのがおもしろくな

って、ひとりでもいきたいほどでした。

かていのゆうべもできるようになったし、モルモンけいもよめるようになったのは、かみさまのおかげです。わたしももう8さいなので、バプテスマをうけます。ぜんぶイエス・キリスト様のみ名によって、お話ししました。アーメン。



社会人としての知恵

新 約聖書ローマ人への手紙第15章1節から3節に、このような聖句があります。「わたしたち強い者は、強くない者たちの弱さにならなければならない。自分だけを喜ばせることをしてはならない。わたしたちひとりびとりは、隣り人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばすべきである。キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかった。むしろ『あなたをそしる者のそしりが、わたしに降りかかった』と書いてあるとおりであった。」

私は会社に入った時、この聖句を社会人としての信条にしようと決心しました。一緒に入社した人々と話し合ってみると、彼らの目的がいろいろであることが分かりました。「出世するため」「お金持になるため」など、様々です。すでに福音を知っている私たちには、一般の方とは違う目的があると思います。神様が生きていらっしゃる、生ける予言者がおられることを知っている私たちは、啓示の導きによってこの人生を送ろうと決心しています。ですから、一般の方々と同じ目的で働こうとすると、イエス・キリストの福音を守れない事態に陥ることがあります。

私はこの聖句を掲げて社会に出て行きましたが、何度も何度も打ちのめされました。そこで考えたのが、朝早く出社して、毎朝聖句を頭の中にたたき込むことでした。そうしないと、すぐ世の思いに押し流されてしまうからです。まず、1時間位早く会社に行き、聖典を読みます。それから、ひざまずいて祈ります。「仕事が成功するように……」というのではなく、「きょう一日、キリストの福音の精神に従って働けるように……」とお祈りします。

私が会社でひざまずいてお祈りするようになったきっかけは、以前教会でこんな話を聞いたからです。アメリカのある大きな会社の社長が、朝早く出社して、副社長の部屋に行きました。ドアに手を掛けると、少し開き、室内の様子が見えました。副社長がひざまずいてお祈りをしていました。社長はびっくりして、あとで副社長に何をお祈りしていたのですかと尋ねました。副社長は、「きょう一日、



地区代表
柏倉 仁

会社でキリストの愛を実践して働けるようお祈りしていました」と説明しました。

私はこの話にとっても感銘を受け、「私もしなければ……」と思いました。しかし、私は副社長ではないので個室がありません。なんとか良い方法はないものかと考えた末、朝一番に行き、だれも来ていないところでひざまづくことにしました。社会人になってからの14年間を振り返ってみて、この習慣がとても良かったことを証します。残業で夜遅く疲れ切って帰った翌朝は、とてもつらく感じたことがあります。しかしこの習慣だけは続けてきました。朝早く職場で聖典を読んでからひざまずいて祈ると、とても謙遜になります。そして一生懸命にやろうという気持ちがわいてきます。そのようにすると、ほかの人を押しつけるやっつけという気持ちがでないのです。一緒に仕事をし、一緒に楽しんで、協力して行なった仕事から生み出される利益で皆で生活していこうという気持ちになります。

アルマ書第60章23節の中程に、次のような聖句があります。「神は『まず器の内部を清潔にして、その後器の外側も清潔にせよ』と仰せになった。……」世の中で仕事をしていると、器の内部を清潔にしないとその清さが外には出て来ません。ですから自分の心を清い状態にする必要があります。いくら外面を美しく装っても内面が汚れていたら無意味です。まず内側をきれいにすると、外側をどのようにしたらいかがおのずと分かってきます。

また、アルマ書第34章17—28節を読みますと、お祈りの大切さがよく分かります。いつでも祈りのある生活をし、そして聖典をよく読むことが大切です。このことは家庭にあっても職場にあっても大切なことです。

また、信用を勝ち得るためには誠実であることが一番大切です。それから社会の中では愛を持って接することが大切です。会社の中で私が心掛けていることは、他人の悪口は絶対言わないことです。悪口を言わず誠実であること、建設的な意見を出すことです。どんな場合でも、誠実と愛を持って接する以外に方法がありません。私は今まで教会の教

え以外の方法で成功したことがありませんでした。神様から教えられたように、誠実に付き合い、愛を持って接することによって、相手の気持ちを次第に自分の方へ向けることができます。私はこのようなことを何回も経験しました。この時に、神様の教えは不思議だとつくづく思います。神様の方法で行なった時に、神様は助けて下さいます。神様の方法によらなければ全然助けがありません。このことを自分自身の体験から強く感じています。

若い人は世の中で難しい問題にぶつかり、思い悩むことがあると思います。そういう場合でも、やはり福音をまじめに実践することが大切だと思います。

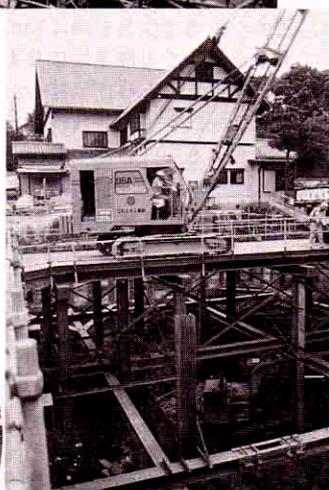
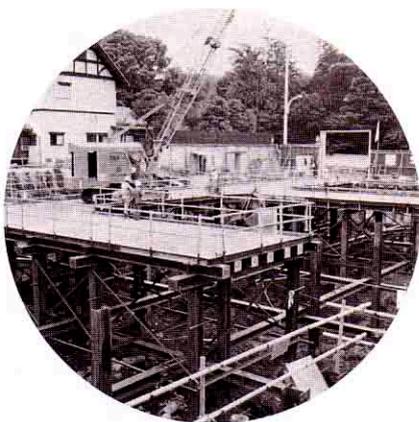
新約聖書ヤコブの手紙第1章21節に次のような聖句があります。「御言には、あなたがたのたましいを救う力がある。」私たちはこのことによく心を配る必要があります。とにかく一番悪いのが「心」の病気で、これは直すのは困難です。私たちは主に祈ることが大切です。また聖典をよく読むことも大切です。イエス・キリストの教えを教会の中だけでなく、社会でも実践していただきたいと思います。実践してみるとイエス・キリストの教えが分かってきます。

私たちはまた、いつでも人々と気持ちよくあいさつができるようにしたいと思います。自分の生活を振り返ってみると改善できることがあると思います。ちょっとしたことでよいのです。社会人として身の回りの基本的なことを実践できるようにする、これが福音の実践につながるのです。大きなことでなくてもよいのです。どんなことでもまず目標を立てそれを必ずやり通すことです。難しいことかも知れませんが、これは大切なことです。自分の生活や性格を変えること、これに成功すると、もうイエス・キリストの福音を実践するレールに乗ったと言えると思います。

福音は実践するものであるということが経験から得た私の最も強い証です。すべてをイエス・キリストのみ名により申し上げました。アーメン。



東京神殿， 基礎工事進む



地下十数メートルの深さまで掘削が進み、すでに基礎の鉄骨も組まれるなど、工事は順調に進んでいます。

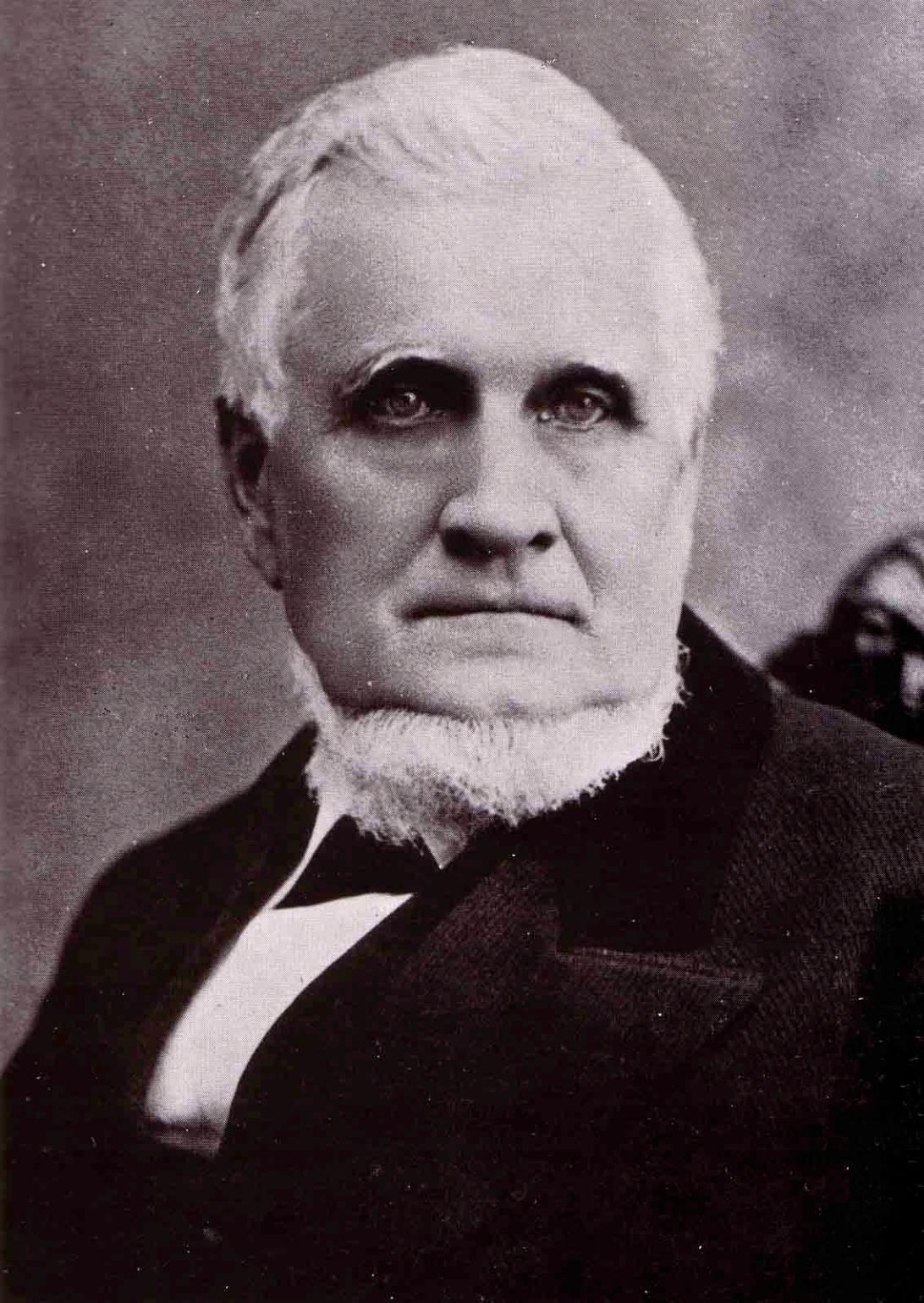
(写真は9月22日撮影)

ジョン・テイラー (右の写真)

1808年11月1日、英国ウェストモアランド郡ミルソープにて出生。1880年、第3代大管長となる。予言者ジョセフ・スミスと親交があり、予言者がカーセージで殉教した折、その場に居合わせて負傷した。

合衆国東部、英国、フランス、ドイツで伝道し、多くの人々に福音を宣べ伝えた。また、彼の尽力によって、モルモン経がフランス語、ドイツ語に翻訳された。

写真撮影：C・R・サベージ



聖徒の道

1978年11月20日（毎月1回20日発行）第22巻第11号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

